

# デュイ分類法の形成過程

小 倉 親 雄

## 1

メルビル・デュイ (1851—1931) によって創案され、“デュイ分類法”として広く知られているものも、もともとはといえば、当時彼が在学中であり、同時にまた“学生補助員”という名のもとの、その業務を手伝っていたアマスト大学 (Amherst College, Mass.) 図書館への適用を企図したものであり、従ってそれが全世界にまで普及し、しかもその生存中に、‘中国・日本・印度・豪州のような遠い国々においても採用されて行くのを直接見届けることができる’などとは、自身全く夢想だにしないことであった。それだけではなく、この分類法は、後になっては書架上における図書それ自体を体系順に配列して行くものとして強調されもし、またそのように受けとられるものになっては行ったものの、元来は決してそうした目的のために考案されたものではなかった。すなわち直接には、アマスト大学図書館に新しく主題による目録を追加し、従来からの著者目録の外に、蔵書に対する主題検索の道を開かんがためであり、そのための分類目録を作製して行く必要からであった。すなわちその起原は至って身近かな現実に発している。

しかしながら、アマスト大学における懸案を一先ず解決し得たときをもってデュイの心は、自分の大学図書館という枠を乗り越えて、広く他の図書館、さらには国際的視野のもとで、世界の図書館をもその対象とするものにまで拡大されて行くことになった。1876年という年は、彼のものが“アマスト大学分類法”あるいは“アマスト十進方式”<sup>1)</sup>から、同時にまた世界の分類法としての第一歩を踏み出した記念すべき年である。すなわちこの分類法が、アマスト大学当局から刊行 (初版, 1,000部) されるとともに、デュイ自身が別途また、この年公刊された連邦政府教育局編の“米国公共図書館報告書”<sup>2)</sup>中の一編として、“十進分類法と主題索引”と題し、25ページ

1) 拙稿：メルビル・デュイの「起原論文」について —デュイ分類法の創始とその歴史的意義 京都大学教育学部紀要第14号 昭和43年3月

2) Dawe, George Grosvenor, ed.: Melvil Dewey; seer; inspirer; doer 1851-1931. N. Y., Lake Placid Club, 1932, p. 78.

3) “Amherst Classification” *Lib. Jour.* Vol. 57 (No. 3), 1932 (Feb. 1), p. 146.

“Amherst Decimal Plan”. LaMontagne, Leo E.: American library classification, with special reference to the Library of Congress. Hamden, Shoe String, 1961, p. 208.

“Amherst Plan”. Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 170.

4) A Decimal Classification and Subject Index. *Public Library in the United States of America*, 1876, pp. 623-648.

デュイは彼の“Decimal Classification and Relative Index”を1875年、修士論文としてアマスト大

にわたり、1万3,000余語をもってその分類法について詳述し、このようにして広く国際的に知られるようになったからである。すなわちドゥ(Grosvenor Dawe, 1863—)も記しているとうり、これによって‘デュイは始めて、彼の十進分類法を、相当永久的な形で、合衆国ならびに世界の図書館人思想家の前に持ち出すことができた’ためである<sup>5)</sup>。またファーガソン(Milton James Ferguson, 1879—)は、デュイ分類法の公表、その世界的普及、そしてこれが館界にもたらした計り知ることのできない利便に触れるに当って、同年ベル(Alexander G. Bell, 1847-1922)によってなされた電話器の発明に言及し、米国が独立百年期を祝ったこの年には、‘何かしら新規なふん囲気が漂っていた’と記して、そうした中における大きな事績の1つとしてこれを回顧している<sup>6)</sup>。

このように、アマスト大学図書館の内部にその源を発し、主題目録を作製して行く上に必要な分類法としてのその素案を改訂・展開して行く過程において、直接図書および小冊子類に分類番号を付与して書架上に配列してみた結果、目録分類の上にもつものと同様の価値が発見されるに至って、かえて後には、書架上における図書を分類する方法としての機能に大きく傾斜した方向をたどるものとなった。すなわち図書配架の実際にそれを適用することは、その当初の目的から言えば、それに付随して生まれて来た副産物にすぎず、しかもこの副産物は、さらに“貴重な二重の副産物”をも生み出すことになった<sup>7)</sup>。それは‘書架によって、図書の位置を定着させて来た因襲的な固定式配架法に代る、弾力的な相対的図書配架法’の一般化である。そしてデュイ分類法の広範にわたるその普及は、過去長い歴史を支配して来た図書の蔵置・配架の形態を、国際的規模において、その根底からくつがえしてしまう結果となった。“革命的分類法”と呼ばれるのはその意味においてである。そして相対的配架法の普遍化に伴って、絶対(固定)的・相対(可動)的という区別はもちろんのこと、図書館人のうちその多くの人々には、もはや、“相対的”という語が一体何を意味するかさえも分からなくなってしまったのがその後の実情である<sup>8)</sup>。フレッチャー(William. I. Fletcher, 1844-1917)によると、古い配架方式が一般的には放棄されてしまい、新しい方法に代って行った時期は1890年代のことであるという<sup>9)</sup>。すなわちデュイ分類法が公表されてから約15年の後である。

最近(1965)におけるデュイ分類法のアメリカ国内における採用率は、全図書館の約90パーセント、すなわち公共図書館のほとんどすべて、学校図書館ではまず例外なしの100パーセントと報

学に提出(Broadford, S. C.: Documentation. Wash. Public Affairs Press, 1950, p. 15), 大学は1877年, 正規の課程において, 修士(M. A.)を授与したという(Lib. Jour., Vol. 57, 1932, p. 145).

5) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 285.

6) Ferguson, M. J.: Richardson Rogers Bowker. Chic., ALA., 1953, p. 23. *American Library Pioneers, VIII.*

7) Ranz, J.: The printed book catalogue in American libraries: 1723-1900. Chic., ALA., 1964, p. 83. *ACRL Monograph, No. 26.*

8) Rider, F.: Melvil Dewey. Chic., ALA., 1944, p. 39. *American Library Pioneers, VI.*

9) Fletcher, W. I.: Public libraries in America. 2nd ed. Boston, Roberts Brothers, 1895, *Footnote 2. Columbian Knowledge Series, No. 1.*

ぜられている<sup>10</sup>。一方デュイ自身は1931年、すなわちその死去の年、彼の分類法が20か国の中で、1万4,000の使用者(users)を持つに至ったことを記録し、あわせて1926年における調査結果として、アメリカ国内では公共図書館の96パーセント、大学図書館の89パーセント、さらにイギリスの公共図書館でも56パーセントが使用していることに言及し、さらにこの数字を他の分類法のそれと比較して、カッター(Charles Ammi Cutter, 1837-1903)の“展開分類法”はわずかに公共図書館で20館、大学図書館では4館、“議院図書館分類法”になると公共図書館で4館、大学図書館でも同じく4館にすぎないことを指摘している<sup>11</sup>。一方またこの分類法の他国語への翻訳については、セイヤーズ(W. C. B. Sayers, 1882-1960)が、11か国語によりその全部または一部についての訳出が行われている<sup>12</sup>としているのに対してフェローズ(Dorcas Fellows, 1873—)<sup>13</sup>は、その内訳をフランス、ドイツ、オランダ、ノールウェー、イタリー、スペイン、ポルトガル、ボヘミア、ハンガリー、フィンランド、中国それに日本語の12か国語とし、その普及範囲としては、‘すべての大陸と多くの国々’と記した後、内訳として、北・南米の諸国、ヨーロッパの多数国、アジア、ハワイ、フィリピン、ジャバ、オーストラリア、アフリカなどの諸地域を掲げている。またイギリス国内では、1938年のソントン(J. L. Thornton)による調査結果として、デュイ分類法をそのままの形でそれを用いているところが498館、修正した上での使用館16をそれに合すると514館に上るのに対して、カッターの分類法はわずかに1館のみ、議院図書館のものは9館、一方イギリスにおいてつくられたブラウン(James Duff Brown, 1862-1914)の“件名分類法”も41館にすぎないことが報告されている<sup>14</sup>。ヒル(Frank Piersce Hill, 1855—)によると、デュイ分類法を採択している図書館の数は、他の著名な分類法を使用しているところを合した総数をも上廻るであろうという<sup>15</sup>。またカスター(Benjamin A. Custer, 1912—)のいうように、デュイ分類法は地球上のほとんどすべての国にその支持者を擁しており<sup>16</sup>、さらにムント(Wilhelm Munthe, 1883—)が‘公共図書館に関する限り、デュイ分類法は1つの既成事実である’とのべているとうり、何よりもまず公共図書館に対するその影響は圧倒的であり、テラー(Desmond Taylor, 1927—)によっては、‘公共図書館におけるデュイ信仰は、中世ヨーロッパにおける神学と同様、正しく安泰の観がある’<sup>17</sup>とさえ記されている。

10) Dewey Decimal Classification and Relative Index. Ed. 17, 1965. *Editor's Introduction*, by Benjamin A. Custer.

11) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 169.

12) Sayers, W. C. B.: *An introduction to library classification ... 9th ed.*, Lond., Grafton, 1955, p. 124.

13) *Lib. Jour.*, Vol. 57 (No. 3), 1932(Feb, 2), p. 155.

14) Sayers, W. C. B.: *Ibid.*, p. 112.

15) Hill, P.: *Decimal Classification Reminiscences. Lib. Jour.*, Vol. 45 (No. 4), 1920 (Feb. 15), p. 157.

16) Dewey Decimal Classification and Relative Index, 17th ed., 1965. *Editor's Introduction*, by Benjamin A. Custer.

17) Munthe, W.: *American librarianship from a European angle.* Chic., ALA., 1939, p. 31.

Taylor, D.: *Is Dewey dead? Lib. Jour.*, Vol. 91 (No. 16), 1966 (Sept 15), p. 4039.

ラモンターン (Leo E. LaMontagne) は、デュイが分類法の問題に興味をいだき始めた年を1873年としているが<sup>18)</sup>、むしろそれよりもっと早い時期、すなわち彼が学生補助員としてアマスト大学図書館の業務に加わるようになった直後の時期にそれを求めるべきであろう。すなわちこのような形での勤務は、1872年の秋学期、第3学年に進学したときと同時に始したが、それ以前と以後とでは、彼の生涯の上には、明確な一線が画され得るほどの大きな変化が介在しているからである。それというのも、それ以前のデュイは、一応教育の分野に自己の生涯を托す決意をしてはいたものの、しかもその直前では、再び聖職者としての道を選ぶべきではないかという疑念が台頭して悩まされ、その解決を迫られるという、おそらくは彼の人生における最も深刻な精神的困迷に見舞われて来たからである。そして当時はまだこの大学の哲学教授であり、後には(1876)総長になったシーリー (Julius Seelye, 1824-1895) の助言を求め、その示唆と教示とを得て、結局は聖職者への道を捨てて当初の決意に復帰し、ただ教育の中に在っても、当時においてはまだ、何人によっても採り上げられていない内容のもので、彼自身が構想し続けて来た“家庭教育”(home education)の分野に専念する方向を確定することになったからである。そしてその時期が1872年の夏期、すなわち第2学年の終りであり、そのあと、暑中休暇を挟んでの9月に始った秋学期からは、精神的安定を回復した上で、上記“家庭教育”を構成している要素の1つであるとともに、他の諸要素よりはるかに広い領域を占め、しかも全体に対して中核的な役割をもつものと考えた図書館に、最も大きな関心を抱くようになっていたからである。すなわち彼自身の言葉に従えば、この時以後をもって、“第2番目の新たな人生の門出”<sup>19)</sup>が始っており、そして最初の門出が漠然として意味において広く“教育”の分野を目指したものであったのに対して、こんどの再出発は、教育の分野においても“家庭教育”、さらにその中に占める書物と読書の問題、そして結局はそれを媒介する社会機関としての公共図書館というふうに、その志向分野がいよいよ局限されて来た姿を執っている。新学年の始まると共に、“学生補助員”としての仕事を自分の学ぶ大学図書館の中に求めて行ったのは、このようにして設定し終った方向の中で、その対象に向って積極的に接触して行こうとする意欲的な態度の1つの現われに外ならない。

ドゥによってデュイは、第2学年を終ったあと、図書館を整理し直す(re-arrangement)という問題に取り組んで行くに従って、しばしばこの大学の教授団と接触を重ねて行くようになった事実が伝えられている。正しく、1872年9月以降の時期を意味するが、それから1873年5月8日の“起原論文”提出にいたるざっと9か月間が、要するにデュイ分類法創始の背景をなす期間に該当する。もちろん何をもってその創始と呼ぶかは人によっても異なっており、たとえばフェロ

18) LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 48.

19) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 48.

ーズがその創案を‘1873年の始め’<sup>20)</sup>としているのは、上記ラモンターンの言葉と同じように、“起原論文”を重視しての立場からに外ならない。これに対してドゥは、十進分類法という考え方が始めてデュイの心の中に浮び上って来たのを“1872—73”としており<sup>21)</sup>、これは“起原論文”に至る過程期間中にそれを求めようとするもの、一方またライダー (Fremont Rider, 1885—) によっては、“起原論文”がすなわち、その“誕生”を意味すると見なす別の表現が用いられている<sup>22)</sup>。

しかしながらデュイ自身によっては、その分類法の考案は1872年、そして“起原論文”を提出した1873年は、彼が図書館界に試みて来た数多くの事績の中で、とにかくその最初のを発表し得た年としてそれぞれに位置づけられ、創始のことに、それを上述の形で発表し提出したこととの2つは、一応区別した形で取り扱われている。すなわち‘1872年に私は、私の十進分類法を考案し、それを1876年に公刊した’とのべ<sup>23)</sup>、また別途‘1872年から1876年にわたって、各部門における諸教授の援助と、さらにはこの問題に深い関心を抱く図書館人の協力とを得て、10個の類、100個の綱、1000個の目とを逆ベークン式の順序に従って作製して行った’<sup>24)</sup>ともべている<sup>24)</sup>。いずれも創始の起点を1872年とする立場からの言葉である。すなわち彼においては、構想そのものの発端は1872年であり、1873年は一応の輪郭を得てそれを提出した年、さらに1876年(6月10日付)は、その1000区分表(要目表)と主題索引(Subject Index)、それに序文を付した合計42ページ(序文12、表12、索引18ページ、600項目)のものとして、デュイ自身の名は載せない形ながら刊行された年、そのうち1873年から76年に至る間、アマスト大学図書館において彼が果たした主要な業務といえ、その分類法を完成に導くこと、具体的には素案の改訂と展開、またそれに並行しての、この図書館の再編成ならびに蔵書の再分類であった。

デュイ自身が彼の分類法創案の年とするこの1872年は、既述の事情によって、9月をその起点とするわずか4か月の短期間にすぎないが、分類法の問題が具体的に彼の前に大きく浮び上って来たのは、やはり“学生補助員”として、図書館の内部に直接接触し、その実態に対して省察を加える機会が与えられるようになったことと深いつながりを持っている。ドゥが‘物事の根底に迫って行かずにはおれないデュイの性格が、アマスト大学図書館の補助職員として選ばれたとき、非常に大きく役立つことになった、<sup>25)</sup>と記しているのは、この機縁とデュイの為人との2つを結びつけて理解しようとするものであるが、たしかに彼によってのみ新しい分類法の構想が培われて行ったとすれば、それは彼自身に具ったそのような性格に負う面も決して少くはないであろう。というのは、デュイをもって、この大学が創立(1821年)されて以来、学生の身分のままで、図

20) *Lib. Jour.*, Vol. 50 (No. 3), 1932 (Feb. 3), p. 154.

21) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 319.

22) Rider, F.: *Ibid.*, p. 29.

23) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 107.

24) Dewey, M.: *Decimal Classification beginnings. Lib. Jour.*, Vol. 45 (No. 4), 1920 (Feb. 15), p. 152.

25) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 111.

書館に勤務した最初の人物として取扱っているもの<sup>26</sup>がない訳ではないが、しかし実際には1866年頃から、すでにこの大学図書館においては、数名の学生を雇傭して、その業務を手伝わすことが行われている<sup>27</sup>。この事実は同時にまた、デュイがこうした形で勤務するようになった発端を、学資を得るためのかっこうな手段であったためと見なしているものもある中で<sup>28</sup>、かえてデュイの場合は、図書館の問題に積極的に取り組んで行こうとする意欲の現われ、その行動の第1段階と見た方が、より真実に近いことを証することにもなるであろう。彼が逸早く大学教授団との間に、すすんで接触を保とうとしたのは、いわばそれにつぐ第2の段階であり、しかもその直接の原因が図書館内部の“再整理”，換言すると“図書館近代化”（library modernization）<sup>29</sup>への志向に発しているとするれば、彼をその方向に駆り立てて行ったものこそ、外ならぬこの図書館がもつ内部の実態であり、それが彼をして多くの疑念に誘わずにはおこななかったからである。

カスターは、‘1872年におけるアマスト大学図書館の蔵書に見られた混乱’が、デュイをして、それを整備し、組織化しようとする積極的な意欲に駆り立てずには到底おこななかったであろうと記している<sup>30</sup>。彼は“混乱”（confusion）という言葉のもつ具体的な内容には直接触れていないが、ドゥによってもそれには“混乱状態”（confused situation）という表現が与えられており、そしてやや具体的にここでは、デュイをして満足せしめ得なかったものとして、この図書館の蔵書が何よりもまず近づき難い（inaccessible）形を執っていたこと、ついで移動（shifting）と変更（change）とを免れ得ない状態に放置されていたことの2つを挙げている<sup>31</sup>。もちろん蔵書への接近を困難にしている条件といえ、それは決して単一的なものではなく、この大学の場合、後に触れる如く、目録ひいては蔵書と利用者との結合機能の弱さが、その大きな原因の1つに挙げられるであろう。また蔵書の移動とそれに付随する諸変更という問題は、この図書館の場合もまた、いわゆる“固定（絶対）式配架法”（fixed or absolute location）を採っていたことに由来する必然の結果に外ならない。結局逸早くデュイの心を捉え、疑念へと誘って行ったものは、この大学図書館において準備されて来た目録の不備、つぎには伝統的な図書の蔵置形態のもつ不合理との2つに要約することができる。デュイにおける“アマストの夢”（“Amherst dreams”；“Amherst vision”）<sup>32</sup>も、その源は上述の諸条件によってアマスト大学の図書館が当時呈していた“混乱状態”であり、さらにそれは、数多くの他の図書館を実地に調査した結果によっても同様の事

26) *Lib. Jour.*, Vol. 57 (No. 3), 1932 (Feb. 1), *Melvil Dewey*.

27) Amherst College, Amherst, Mass. *Public Libraries in the United States of America, 1876*, p. 67-77.

28) Rider, F.: *Ibid.*, p. 17.

29) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 49.

30) Dewey Decimal Classification and Relative Index. Ed. 16, 1958. *Editor's Introduction*, by Benjamin A. Custer.

31) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 49, III.

32) *Ibid.*, p. 251.

Shera, Jesse H.: *Libraries and organization of library*. Lond., Crossy Lockwood, 1966, P. 219 (*Index*).

態が確認されるに及んで、問題は単にアマスト大学図書館のことにのみ止まらず、広く図書館のすべてに関連するものとして展開されて行くことになった。

## 3

デュイは自ら、彼の十進分類法は、‘目録および索引を作製して行く目的のために考察されたものであったが、実地に試みた結果、書架上における図書や小冊子類にその番号を与えて配列して行く上にも、非常に有効であることが発見された’と記している<sup>33)</sup>。すなわち第一義的には目録作製用としてであり、書架上の図書配列にそれを適用することは、実はその後引きつづいて来た着想であって、両者の間には、その時点において相違があったことに言及したものである。ラモンターンはこの言葉をうけて、デュイ分類法は、後になっては、図書を体系的に、書架上に配列して行くための方法として、その意味が強調されるものになっていったにもかかわらず、もともとはと言えばその目的のために開発されたものではなかったことを指摘し、同時にまたデュイがまず最初に関心を抱いたのは、目録および索引作製の問題であり、固定式配架に替るすぐれた方法についての考案をめぐるようになったのは、彼が訪ね廻った図書館のほとんどすべてに、固定式が行われている事実と接し、非常な驚ろきを受けたその後のことであったと解している<sup>34)</sup>。一方ランツ (Jim *dim. of James Ranz*, 1924— ) によれば、その間の消息ははるかに具体的である。すなわちデュイ分類法は元来分類目録 (classified catalog) に対して使用するよう構想されたものでありながら、それが主として別個の目的、換言すると書架上における図書や小冊子類の配列に使用されるようになったこと、同時にまたデュイが早速それを適用したのは、アマスト大学図書館のカード目録に対してであり、ただデュイ自身が、その分類法に則して作製した分類目録が、印刷冊子目録の形を執って現われたのはむしろおそく、その始めは、デュイを編さん責任者として刊行された“アメリカの図書館協会選定目録” (A. L. A. *Catalog*) 第2版 (1904) であり、それに先立つもの、しかも規模の大きい一般図書館において、デュイの目録思想を完全に適用した最初は、1877年館長ラーネッド (Josephus Nelson Larned, 1836-1913) により、バッファロー青年会図書館 (*Buffalo Young Men's Association Library*, N. Y.) で作製されたものであったことを伝えている<sup>35)</sup>。

デュイは、1873年アマスト大学当局に提出したいわゆる“起原論文”の中で、彼の分類法は、実のところその起原を、最もすぐれたものと一般に考えられるようになったカード目録法 (card catalogue system) を慎重に研究して来た結果に負うものであること、従って古い方法にまさるカード目録の長所をそのまま具えたものである点に言及し、別途 (1876) また彼の分類法とカー

33) Dewey, M.: A Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 623.

34) LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 179, 180.

35) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 83.

ド目録との関連についてつぎのようになっている。すなわち

大きくなりつつある図書館において、カード式のもつ非常に大きな利点を、ここで指摘する必要はないかも知れない。何はともあれ、すべての図書館員はその利点を熟知していなければならない。自分の分類法にはそれ自体としての独自の利点もあるが、それに加えて、実はカード目録原則のあらゆる利点、さらにはまた、すでに採用されても来、またすぐれた図書館人の強く賛同している“相対的配架法”(relative location)のすべての利点もまた具わっている。すなわちカード目録式と同様、何んらの工夫も準備も要せずして、無限の展開に対する余地が与えられている<sup>36)</sup>...

と。図書についての情報記録法としてのカード使用は、1850年頃のアメリカの図書館では、もはや別に珍しいものではなくなっていたが<sup>37)</sup>、デュイ分類法がその起原を、このカード目録が持つ利点に負っていることの意味は、いうまでもなくその機動性であり、デュイにおける相対的配架法への思想的展開のこれが根拠になっていることを物語るものである。このことはカッターが、“相対的配架法”を、カード目録との関連において説明している次の言葉によってよくうかがうことができる。

相対的配架法とは、図書がその時置かれている書架あるいは部屋にはかかわりなく、図書相互間の関係に従って配列される方法であり、カード目録と同様、無限の繰りこみ配架(intercalation)を許し、図書は請求記号の変更を要せずして、他の書架、さらには部屋へと移動して行くことが可能である<sup>38)</sup>...

と。

すでに触れたように、デュイの眼に“混乱状態”として映じたアマスト大学図書館の実情は、一面においては、その蔵書と利用者とを結合して行く目録機能の弱さが醸しているものに外ならないが、彼が目録作製の問題を第一の関心とするに至った背景もまたここに萌していると見ることができよう。この蔵書およびそれに対する目録の面で言えば、この大学はもともとマサチューセツ州西部在住の長老ならびに組合教会派所属の熱心な信徒たちによって、1815年に創立された“アカデミー”(Academy)にその源を發し、カレッジとしての発足は1821年、従ってこの時をもって創立の年と定めている。そして開学当初の図書館は、牧師たちの寄贈による神学関係書その他、ほんのわずか許りの蔵書をもって出発し、実際には、ただ1個の本箱を持つにすぎなかったという。1850年で6,000冊、1855年で1万2,000冊、1875年で3万406冊というのが、その大雑把な足どりであるが、当時における累年増加冊数は平均940冊程度であり、従ってデュイがこの図書館の業務を手伝うようになった1872年当時におけるその数は、2万7,500冊前後と見てほぼ差支えないであろう。そしてこれらの図書が書架上に配列されてたその実情は、書架そのものを、大きく歴史・哲学・科学・神学などの、きわめて大雑把な主題の下に配分して、それを数字化し、そのもとに個々の書物をただ番号順に配架して行く方法であった。もちろん固定式配架に外ならないが、その中でも最も単純な形態である。すなわち上述の包括的な主題の下での、小主題の細

36) Dewey, M.: A Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 634.

37) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 52.

38) Cutter, C. A.: Rules for a Dictionary Catalog. 4th ed., rewritten, 1904. *Definition*.

分は考慮されず、従って書架内の区画 (tier), 書だな (shelf) もそのための区分には全く加わらない“数値配置”(numerical arrangement)の方法に拠るものであった<sup>39</sup>。

この蔵書配架に対して、1855年に始めて著者名によるアルファベット順目録が刊行され、爾後の増加図書に対しては、カードをもってする著者目録が1864年から新しく開始されたが、1871年、すなわちこの大学が創立50周年を迎えたのを機会に、その間に至る約15か年の増加図書(1万4,300冊)に対する同じく著者目録が“補遺”の形で印刷に付され、デュイ在学当時に及んでいる。すなわち主題をもとに検索し得る目録の準備を欠いまま、著者目録一種類を持つにすぎなかったのである。デュイが“起原論文”の中で、‘すぐれた主題索引をもちたいというわれわれの願い’とのべているのは、具体的にはすぐれた分類法に基づく主題目録の必要を強調したものであって、従来の著者目録に加えて、それとは対照的な形を執る分類目録を追加して行き、語順・体系順両種の目録を準備することによって、利用者の要求を満たし得なかったことから惹起されていた“混乱”状態をまず取り除こうとしたことを示唆するものである。

デュイは1873年5月8日、“起原論文”を提出して大学当局の承認を得、大学図書館への適用が採択されるとともに、ただちに、全蔵書に対する新目録作製作業が開始されたこと、そしてどのような程度においても、その作業のために図書の利用が妨げられることがないように配慮の上で執った実際方法について言及している<sup>40</sup>。いずれにしても1873年から76年に至る3か年は、彼にとっては試験期間であり、実際にはこの新しい目録作製の作業に並行して、図書の実際配架ならびに分類法素案の改訂・展開の作業もまた推進され、その結果は、彼の方法が、そのために余計の経費を必要としないでも、その図書館の効用を著しく増進し得るであろうという当初の考えが、結局は正しいものであったことを確信するに至ったとのべている<sup>41</sup>。

以上のように、デュイにおける当初の発想は、まずアマスト大学図書館にすぐれた分類目録を追加し、それに必要な新しい分類法を開発することに始まり、つぎにはそれに並行し、書架上における図書の実際配架にも試みた結果が、結局はリチャードソンによって、“相対的配架の十進方式”<sup>42</sup>と呼ばれているとうり、あたかも彼の分類法は、旧来の固定式を廃棄して、相対的配架法を促進することを目的として考案されたかの如き印象を強く後世に残すことになった。トッパー(Maurice Folcom Tauber, 1908—)が、デュイ分類法創案の動機をもって、ほとんどすべての図書館が当時準拠していた“固定式配架方式”(fixed location system)を打破(counteract)するためであったとしているのは、この理解に立つ代表的なものであるが<sup>43</sup>、プレディク(Albert

39) I)の拙稿参照。

40) Dewey, M.: A Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 639.

41) *Ibid.*, p. 623.

42) “Decimal system of relative location”(Richardson, E. C.: *Classification; theoretical and practical*. 3rd ed., N. Y., Wilson, 1930, viii).

43) Tauber, M. F.: *Technical services in libraries*. N. Y., Columbia Univ. Press, 1955, p. 19.

Predeek, 1883— )は、デュイ分類法をもって、分類目録のための基盤 (basis) というよりは、むしろ“配架の方式” (shelving system) であるとし<sup>44)</sup>、マン (Margarett Mann) もまた、それは‘書架上における図書の配置だけに限定されるものではなくて、主題の分類配列を採る目録作製の方法にもなって来た’<sup>45)</sup> とのべている。これらはいずれもデュイ分類法が実際に、図書館界に与えて来て大きな影響を基に、その面からこの分類法に触れた言葉であるが、事実はむしろそれとは逆の形を執るものであった。

4

デュイが、アマスト大学図書館の蔵書に対する主題索引の規矩として、分類目録作製の必要を強調し、そのことが結局彼の分類法開発の要因をなしているとするれば、主題目録として彼がこの際分類目録の方を選んだことは、同時にまた大きな歴史的意義を担うものと言わなければならない。すなわちカッターもいうように“主題目録” (subject catalog) といった場合、それは“主題の目録” (a catalog of subjects) の意味であり、従ってそれは分類別の配列をとっておろうと、あるいはまた主題名辞の語順配列を執るものであろうと、そうした編成上の相違には無関係である<sup>46)</sup>。要するに目録利用者の主題接近 (subject approach) に応える形で作製される目録に対して与えられる名辞に外ならない。従ってその中には、単に分類目録のみならず、件名目録も含まれる。もちろん“件名”それ自体の内容は、歴史的にもその把握の仕方が種々に異っており、現代われわれが一般にこの目録として理解しているものは、正しくはヘィキン (David Judson Haykin, 1918— ) が指摘しているように、“近代的アルファベット順主題目録”と言わねばならないであろう<sup>47)</sup>。

デュイが主題目録としては分類目録の方を選び、そのための新しい分類法を開発し、それがこの国の目録史上に新たな傾向を生み出したことの意義は、彼が図書館界に大きくその姿を現わして来た19世紀最後の四半期には実のところこの国の分類目録は、まさにその衰退期に見舞われていた事実によってさらに大きく評価されねばならないであろう<sup>48)</sup>。すなわち、論理的分類ということが、本質的には、どのように大きな利点を内蔵しているにしても、その目録の中の果してどこにその図書を分類したらよいか、つぎには果してどこを探せば求める書物が見い出されるかを、正しく知ることが不可能であるという2つの理由から、この国の場合、分類目録を最も熱心に支持して来た人々でさえも、実はほとんど絶望的な状態に追いやられていたのが当時の実情であった。さらにはまたこうした分類目録の窮境に一層の拍車を加えていたのが、あたかもこの時期に、

44) Predeek, A.: A history of libraries in Great Britain and North America. Chic., ALA., 1947, p. 119.

45) *Lib. Jour.*, Vol. 57 (No. 3), 1932 (Feb. I), p. 155.

46) Cutter, C. A.: *Ibid.*, p. 23.

47) 拙稿：件名標目 —— その歴史的背景と構造 学術月報第19巻第11号 1967年2月

48) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 82.

すぐれた辞書体目録の典型となるべきものがすでに現われていたことであった。いうまでもなくそれは、カッターによってボストン・アセニラムのためにつくられた蔵書目録<sup>49)</sup>の出現に外ならない。そして彼の名前を不朽にしている“辞書体目録編成規則”<sup>50)</sup>は、デュイ分類法と年を同じくして公表されたものであるが、この規則も実は、上記蔵書目録編さん過程中的のいわば“副産物”(by-product)として生み出されたものである<sup>51)</sup>。すなわちデュイが分類目録を主題目録として選んだことは、時期としては、すでに館界の大勢が、ほとんど完全に分類目録から離れて行きつつあった一方、それとは対照的な“辞書体配列”(dictionary arrangement)の風潮が、非常な勢いで一般に普及していたときに際会しており、いわばデュイは、そうした大きな転換期において、そのような風潮に正面から立向う形を執って歴史の上に位置している。ランツが、‘デュイ分類法は、分類目録に対する最も強固な反対を除去することになった’<sup>52)</sup>と記しているのは、その間の事情に触れたものであり、この言葉は、デュイ分類法のもつ重要な特徴の1つでもある“主題索引・相関索引”を通じて、分類目録反対者が、その大きな弱点として掲げて来たものをまず取り除き、分類目録の退潮を食い止める役割を果たした意義に言及したものである。そしてこのようなデュイの立場、またその実践は、“分類配列”(classed arrangement)に対する実は彼の強い信託性に基いている<sup>53)</sup>。事実彼は分類配列の強固な信奉者として終始し、その結果は、たとえ辞書体配列が一般的風潮を獲ち得ているとしても、結局はまた分類配列を執るものに戻って来るであろうという信念を崩さず、自然辞書体配列に対する反対者として位置づけられ、辞書体目録に対する分類目録の優越性を信じて疑わなかった人物として取扱われる<sup>54)</sup>。1888年彼が、

私は辞書体目録が好いとは信じない。これまで私は、そちらへの転向を試みては見たものの、そうすればするほど、逆にそれに信を置くことができなくなって来た。たしかにわれわれは、その体系に成る貴重な目録をもっている。しかしその貴重である理由は、その作製に注がれた能力(ability)の故である。辞書体目録は、一般的な普及を見て来たが、しかしそれは一時的な流行(fad)であり、やがてはまたすたれて行くことであろう

とのべた言葉は、それに逆襲しての、

私はそれと全く逆の考えを抱いている。分類目録こそ、正しく今や一時的な流行となり始めている。もちろんなお推進の道をたどって行くことではあろうが、しかしそれからまた再び支持を得ないものになってしまうであろう

と答えたカッターの言葉<sup>55)</sup>と共に、両者間の関係についての極めて強烈な印象を後世に残すもの

49) *Boston Athenaeum Catalogue of 1887-82.*

50) *Rules for printed dictional catalog, 1876.*

51) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 61.

52) *Ibid.*, p. 83.

53) *Ibid.*, p. 85.

54) Mills, J.: *Modern outline of library classification.* 2nd impression. Lond., Chapman & Hall, 1960, p. 57.

55) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 83, 1888年9月27日。カッキルズ(Catskills, N. Y.)で開かれた図書館人会議での発言。*Lib. Jour.*, 13: 315 (*Proceeding of the Conference of Librarians*).

であり、同時にまた、この国における目録界がたどりついた、非常に重大な局面をわれわれに提示している。すなわち1888年という年は、カッターの“ボストン・アセニウム蔵書目録”が完結して4年後であり、一方デュイによってアマスト大学図書館に開始された分類目録の後を承けて、1877年には上述のようにバッファロー青年会図書館がそれを採用し、その成功がさらに1879年におけるミルウォーキー公共図書館 (Milwaukee Public Library, Wis.) への採択へと導き、1885年における蔵書目録の刊行となった。これがデュイ思想 (Dewey's ideas) に準拠して編さんされた印刷分類目録中の最初の1つである<sup>56)</sup>。すなわち多少の修正を加えながらもデュイ分類表の主題区分に従って大分けにし、それにアルファベット順の著者書名索引と主題索引を付したものであるが、その主題索引は、デュイの“相関索引”を模範とし、それに極めて近い形を執ったものである。さらにまたその翌1886年になると、このミルウォーキーのものにならない、それに創意を加えた形で、コール (George Watson Cole, 1850-1939) により、フィッチバーグ公共図書館 (Fitchburg Public Library, Mass.) の蔵書目録が刊行されている<sup>57)</sup>。すなわちカッターの“ボストン・アセニウムの蔵書目録”が、いよいよその声価を高めつつあった一方、デュイ分類法を適用しての新たな目録が相ついで作製されて、衰退の一路をたどりつつあった分類目録が再びその衰勢をばん回する勢を示しつつあったまことに重大な時点に立っていたということが出来る。そしてデュイは辞書体目録の盛行を一時的と見、逆にカッターは、分類目録の再興を同じく一時の流行と判断して、たとえデュイ分類法の採用によって、分類目録そのものの再認識がもたらされても、結局はもとのままに衰微の過程をたどり、歴史の新しい流れをくつがえすほどの勢力には到底なり得ないと見なしているものである。この2人の応酬に関連しランツは、分類・辞書体配列の利点がたとえどのようなものであろうと、カッターは、‘予言者の正確さをもって発言した’と記している<sup>58)</sup>。この言葉は、この国の目録界はその後、結局は彼の言葉通りに、辞書体目録への方向を一路だとして来たからである。1931年といえ、ちょうどデュイがその生涯を閉じた年であるが、当時の実情についてウィリアム・カッター (William Parker Cutter, 1867-1935) は

少くとも合衆国では、分類目録はもはやいささか物珍らしいものである。もしも目録の複製を容易かつ安価なものにした議院図書館の印刷カードが大きな成功を収め得なかったとしたら、分類目録というものはほとんど完全にその姿を消していたであろう<sup>59)</sup>

と記している。すなわちデュイの強い確信にも拘らず、その晩年の頃には、分類目録をもつ図書

56) Milwaukee Public Library: *Systematic Catalogue of the Public Library of the City of Milwaukee; with alphabetical Author, Title and Subject Indexes, 1885*. Milwaukee: Board of Trustees, 1885-86.

Ranz, J.: *Ibid.*, p. 83.

57) Fitchburg, Mass., Public Library: *Classified Catalogue of the Public Library, of Fitchburg, Mass.: Comprising Author and Title Catalogue, Subject Catalogue, and Subject Index ... 1886*. (Ranz, J.: *Ibid.*, p. 84, 113)

58) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 85.

59) Cutter, W. P.: Charles Ammi Cutter. Chic., ALA., 1931, p. 25. *American Library Pioneers III*.

館は、この国の場合、きわめて稀有な事例を残すのみとなった。事実また1890年デュイの図書館長就任と共に開始され、爾後22年間にわたって維持されていたニューヨーク州立図書館 (New York State Library, Albany) の分類目録は、この国最大のものであったにもかかわらず、1911年この図書館が火災に見舞われ、目録もまた同時に焼失してしまったのを機会に、終にその地位を辞書体目録に譲らざるを得なかった事実が<sup>60)</sup>、きわめて象徴的にこの国における分類目録の運命を物語っているといえよう。当時の図書館長でありその責任者でもあったウィアー (James Ingersoll Wyer, 1869— ) によると、如何に最善の辞書体目録であろうと、すぐれた分類目録の位置を完全に満たす訳には行かないもの、すなわち分類目録にはそれ独自のすぐれた機能があることを承知しながらも、当時ではすでに“別の方向を目指しての進路”，換言すれば辞書体目録を指向する館界のすう勢がもはや決定的であり、彼自身も結局はそれに従わざるを得なかったという。いずれにしてもデュイは“分類目録の擁護者・その闘士”，であり、これに対してカッターの方は“辞書体目録の化身” (personification) として、両者は一時全く対照的な立場において理解されている<sup>61)</sup>。ドゥによって直接2人が対話をもった最初は、1873年2月11日頃のことであろうとされているが、その節の話題に関連しデュイが、“彼〔カッター〕は馬に関する書物を馬のもとに置こうとし、動物学のもとにはおこうとしていない”と記録している事実を伝えている<sup>62)</sup>。これはデュイにとっては“起原論文”提出の3か月前、またカッターにとっても、ボストン・アセニャムの蔵書目録刊行の前年であり、目録に対する2人の当時における根本的な態度、その対照的立場をよく示しているということができよう。

## 5

デュイは、‘何人といえども、満足すべき分類目録がもつ、計り知れない優越性を疑うものはない。しかしながら、そのような立派な分類目録を作製することと、この目録を利用すること双方の面で、その行手を塞いで来た困難性が余りにも大きなものであったために、現場図書館人の間には、すぐれた分類目録のきわめて大きい利点にもかかわらず、その考え方は、非实际的であるとして放棄せざるを得ないとする気風が次第に大きく広がって来た’と記している<sup>63)</sup>。この言葉はすでに触れたように、彼が図書館界に大きくその姿を現わした当時が、あたかも分類目録の一路後退をたどりつつあった時期に該当し、その現実を前にしてデュイは、その由来する原因を追求し、それは決して分類目録のもつ本質的な優越性にかかわるものではなくて、この目録の編成ならびに利用上の障害に起因すると見なす見解をのべたものである。彼によると、分類目録に対する最大の反論となって来た事柄は、つねに2つの点に集注されて来、その1つは、目録中の

60) 47)の拙稿参照。

61) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 61.

62) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 158.

63・64) Dewey, M.: *A Decimal Classification and Subject Index, 1876. Public Libraries in the United States of America*, p. 635.

どこに、正しくその書物を置くべきか、他は、その書物が必要とされるとき、適確にはどこを探したらよいか、この双方について知ることができないという事実に帰着するという<sup>64)</sup>。それは‘違った図書館員の場合のみに限らず、たとえ同じ人であっても、その時を異にすることによって、同一および同類図書を、非常に違ったところに、広く分類してしまった’その事実、さらにまた、‘同じ1人の人が長年にわたって分類業務を担当して来たところでは、たしかにある程度の統一性は保たれているものの、その場合でも、同一図書を異った観点で見るという危険性があった。混乱はこのようにし招来されたが、しかしこの危険性は、分類を試みたことのある者にとっては、誰にでも理解される事柄であり、非常に有能な権威者が、如何にしばしば同一主題のものを異ったところに分類しているかを考えて見れば、決して驚くにはあたらない’とも付け加えている。彼が‘分類に付随すべき主題索引が示唆されて来ていることを、自分はよく承知していた’<sup>65)</sup>と書きしるしているその言葉は、彼以前の分類目録には何が欠けていて、そのために上述の如き混乱が引き起されて来、そしてついには人々の心から離れて行ったかを反省したとき、そこに“主題索引”という問題が大きく浮かび上って来たこと、しかも‘その目的に適用するようなものは、何1つつくられて来なかった’という現実が、彼の分類法に主題（相関）索引を不可分にした理由であり、彼自身はむしろこの“主題索引”こそが、その分類法においては“最も重要な特徴をなすものである”とさえのべている程である<sup>66)</sup>。自然彼の分類法は、何よりもまず分類目録を‘満足すべきもの’に改善して行く上に必要なものとして構想され、そのことに不可欠に付随して来た問題が“主題索引”の構成であり、その完成によって分類目録に対する反論はその姿を消して行くであろうというのが彼の予測であった。事実‘分類目録に対する反対者中の若干は何よりもまずどこに書物を分類すべきであるか、つぎには、どこを探したら好いかをこの主題索引が決定して呉れることになったために、彼らが抱いて来た最も強力な反対意見を撤回するようになって来た’<sup>67)</sup>ことを伝えている。そして彼によればこの索引は事実上辞書体目録の“骨組み”（skeleton）でもあり、ただ違っているところは、その主題標目の下に図書の標題が与えられていないだけのこと、従って彼の分類法はいわば、辞書体目録と分類目録双方の利点を結びつける役割を果すものであることを強調している<sup>68)</sup>。いずれにしてもデュイは、彼以前につくられて来た分類目録の不備を改善せんとし、そのためにはこの形をとる目録の本質的優越性に対して、それへの障害をなしているものをとり除き、もって本来の機能を果すものとする方向を設定して行ったということができる。

ストラット（Ruth French Strout）によると、19世紀の半頃までの、アメリカにおける目録作製は、18世紀中にヨーロッパにおいて行われていた“一般的な型”（general pattern）に追従し

65) *Ibid.*, p. 636.

66) Mills, J.: *Ibid.*, p. 57. デュイ分類法第2版（1885）中の言葉。

67) Dewey, M.: *A Decimal Classification and Subject Index, 1876. Public Libraries in the United States of America*, p. 636.

68) *Ibid.*, p. 637.

た形のものにすぎなかったという。しかし1850年スミソン研究所のジュエット (Charles C. Jewett, 1816-1868) によってつくられた目録規則の採用に伴って、始めてこの国の目録作製は、その成年期を迎えるようになったといっても決して間違いではなからうとも書き添えている<sup>69)</sup>。その意味は、この規則そのものは、大英博物館のパニッチィ (Anthony Panizzi, 1797-1879) によるいわゆる“91か条” (*ninety-one rules*) を基にしているものではありながら、決してそれへの追従ではなく、後にはそこからこの国に定着して行った幾つかの新しい“記入原則” (*entry principles*) を発展させて行ったからである。ストラットがここでその代表的なものとして例示しているのは、“団体著者” (*corporative author*)・“別名図書” (*pseudonymous works*)、それに“無著者名図書” (*anonymous works*) などに関してであるが、それらがいずれも“91か条”に対する“重要かつ適切な修正”であり、アメリカにおける目録法発展の上に大きな意義を残すものになったことを指摘している。たしかにジュエットは当時を代表する卓越した図書館人の1人であり、また偉大な指導者ではあったが、しかしランツも指摘しているように、彼は早くから、そして終始変ることなく、分類目録に対しては不満の意を開陳し、アルファベット順目録の擁護に立った人であり、その意味ではおそらく最初の人物と目されている<sup>70)</sup>。そしてプール (William Poole, 1821-1894) もまた同じ立場に立ち、さらにはまたカッターによってそれが継承されて行ったように、19世紀の半ばからその後半にかけて、偉大な事績を打ち樹てた代表的な図書館人の多くが、分類目録からは離れて、ジュエットのこの系列につらなっており、ひいては辞書体目録の路線上に位置している。

ペティ (Julia Pettee 1872— ) は、“辞書体目録” (*dictionary catalog*) と“辞書体配列” (*dictionary arrangement*) という2つの言葉は、歴史的には厳重に区別されて来た事情に触れて、字義的に言えば辞書体というのは、アルファベット順の意味に外ならないが、“辞書体配列”の語は、アルファベット順を執る著者目録、あるいはさらに著者と書名中の要語 (*catch word*) とを同じくアルファベット順に配列したものを、それとは対照的な体系順すなわち分類リスト (*systematic or classed list*) とははっきり区別するという必要上から用いられ、この段階においては、なお“辞書体目録”という呼び名を使用したことはなかったという<sup>71)</sup>。すなわちこの名称が用いられるようになったのは、‘著者とアルファベット順件名リストの2つを一本の配列中に投入する実地の試み’がなされ、この形態のものに対し、全く新しい術語が必要になって来たときであり、すなわち件名の新たな介入こそ、この語を生み出した要因であったことを指摘している。自

69) *Charles C. Jewett's Code for the Catalog of the Smithsonian Institution* (Strout, Ruth French: Development of the catalog and cataloging codes, 1956. *Toward better cataloging codes, papers presented before the twenty-first annual conference of the Graduate Library School of the University of Chicago, June 13-15, 1956*, p. 20.

70) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 60.

71) Pettee, J.: Subject headings; the history and theory of the alphabetical subject approach to books. N. Y., Wilson, 1946, p. 22.

然歴史的には“辞書体配列”の語が先行し、ランツによると、この著者・書名・件名記入を一本のアルファベット順に混配することに対する最後の障害を取りのけた人がジュエットであり、直接には彼が1843年、ブラウン大学 (Providence, R. 1.) の蔵書に対して作製した目録<sup>72)</sup>によってであったという。すなわちこの目録は (576 p.) 2つの部分に分けられ、第1部はアルファベット順の著者目録であるが、各著者の下に、その人の全集、つぎに単行本を同じくアルファベット順に分けて掲載し、その後、他の人によって書かれた伝記書、また時としては必要に応じて書誌的な注記も加えた、まことに綿密なものである。そして無著者名図書取扱としては、書名の中から最初の重要語をとるか、あるいは一番近密な主題名を選ぶか、さらには、“Great Britain”, “United States” の如き標目の下にまとめるかの方法をもってその中に含める措置をとっている。これに対して第2部の方は、非常に詳しい主題索引 (subject index) であり、多くの交互参照を交えての、アルファベット順ならびに分類の2方法に拠ったものである。すなわちこの目録自体は、決して著者・書名・件名記入の3つを混配した形を執るものではないが、内容的にはこの3つのものによって構成され、結局はそれらを一本のアルファベット順にした場合の有用性を示唆し、辞書体目録の基盤を設定する役割を果たすことになった。すなわち辞書体目録に対する本質的要素がこのようにして整った以上、次の段階は、この3つの要素を実際に結び合わせた形の目録の出現であり、プールによって1854年、ボストン商業図書館 (Boston Mercantile Library) の蔵書に対して作製された目録<sup>73)</sup>がその任務を果たすことになった。カッターによるとこの目録は、‘最初の完全な、三重になる連辞的辞書体目録’であるという<sup>74)</sup>。三重 (triple) というのはいうまでもなく著者・書名・件名の3つであり、連辞的 (asyndetic) というのは、“参照” (references) による相互間の連けいが考慮されていることを意味する。しかしながら実際にはここで用いられている件名は、多くの場合“要語書名” (catchword title) であり、参照とは言っても、交互参照はほんの僅かで、そのほとんどは、この目録では使用されていない名辞から、使用されている名辞への誘導を図るための“ヲ見ヨ”参照であるという<sup>75)</sup>。その点から言えば、今日われわれが理解している意味での辞書体目録と全く同じものであるとは言えないまでも、とにかく3つの本質的要素の混配をなし遂げたという意味で、プールを、‘近代辞書体目録の先達’ (forerunner), ‘今日知られている意味における辞書体目録の先駆者’ (precursor) と見なしているのである<sup>76)</sup>。

カッターについて言えば、彼は“理論的配列” (logical classification) がもつ特有の利便について知らなかった訳ではなく、分類目録はそれなりに独自の長所を有するものであることを認め

72) *Catalogue of the Library of Brown University, 1843* (Ranz, J.: *Ibid.*, p. 63)

73) *Boston Mercantile Library Association Catalogue...1854.*

74) The first complete triple asyndetic dictionary catalogue. (Cutter, C. A.: *Library catalogues, 1876. Public Libraries in the United States of America*, p. 534)

75) Williamson, W. L.: *William Frederick Poole and the modern library movement*. N. Y., Columbia Univ. Press, 1963, p. 21. *Columbia University Studies in Library Service, No. 13.*

76) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 64; Cutter, W. P.: *Ibid.*, p. 15.

ながら、ただこの目録は、それを利用する前に、そこで用いられている複雑な分類体系を予め理解してかからねばならないことの煩わしさが、絶対的な障害となって、人々の歓迎するところとならず、結局は遅滞を招いている原因と解し、主題のアルファベット順配列を採択することによって、そのような困難を除去することができるという考え方を、少くとも当面の時期においては抱いていたとランツは見なしている<sup>77)</sup>。

6

すでにのべたようにカッターが、“辞書体目録の化身”とまで呼ばれているのは、直接には彼が完成したボストン・アセニャムの蔵書目録、ひいてはまたその編さん過程において生み出されて来た“辞書体目録編成規則”に与えられた声誉を基としている。このボストン・アセニャムは、その源を1805年創立の“アンソロジー協会”(Anthology Society)に発し、1807年マサチューセッツ州の法律によって、持株制を執る会員組織のもの(proprietary institution)に改組、“社団法人図書館”(social library)というよりはむしろ“私有者図書館”(proprietary library)、さらにその中でおける“貴族的存在”(aristocracy)として存続、今日に及んでいる<sup>78)</sup>。そしてカッターがこの図書館の所蔵目録を完成したのは、実は彼の前任者であり、12年間(1856—'68)にわたってこの館長として在任していた上記プールの事業を継承したその結果としてであった。プールは既述のように、ボストン商業図書館に画期的な蔵書目録を完成した人、従って彼の招聘には、このアセニャムにおいても、すぐれた目録の完成を前提とした大きな期待が伴っていたにもかかわらず、彼の在任中には終にそれを完成することができなかったからである。その未完成の原因についてウィリアムソン(William Landram Williamson, 1920—)は、

目録作製のことが不成功に終わった原因の一部は、年間収書冊数の実数に起因しており、それというのも、頻繁に配架個所を移動しなければならなかったことと、その移動に伴って書架記号の変更を余儀なくされたからである

と記して、固定式配架をとっていたこの図書館が、収書冊数の増大に伴って引き起して来た混乱の実情に触れた後で、さらにもつと本質的な原因をなしたものとして、4つの“基本的要素”に言及している。すなわち“技術”(library techniques)の面でこの図書館は至って未熟・旧式のままにおかれていたこと、つぎには目録作製上の“統一規則”(uniform rules)を細文化し、これに準拠することの重要性についての認識がプール自身においても欠如していたこと、また1862年この目録編さんの直接担当者として招かれたローウェル(Charles R. Lowell, —1870)の完全主義(perfectionism)、そして最後に、しかも最も重要なものとして挙げているのが、この図書館がもつ、複雑かつ不明確な管理組織である。

77) *Ibid.*, p. 61.

78) Cutter, W. P.: *Ibid.*, p. 15.

79) Williamson, W. L.: *Ibid.*, p. 33.

これらの詳細についてはしばらく措き、このプールの、1869年シンシナーティ公共図書館 (*Cincinnati Public Library, Ohio*) の館長に転出した後を承けて来任 (当時32歳) したのが、1860年以来母校ハーバード大学の図書館で、目録部主任アボット (Ezra Abbot, 1819-1884) の補佐役 (assistant) を勤めて来た外ならぬカッターであり、彼と辞書体目録との結びつき、そしてついにはその“化身”と評されるまでになった機縁に培って行ったのも、実はこのボストン・アセニウムである。それというのも、アボットのもとに在ってのカッターは、当時ハーバード大学の図書館において、強力に進められつつあった“アルファベット順分類目録” (alphabeticoclassed catalogue) をすぐれたものとし、辞書体目録に対しては何んら積極的な関心を抱いてはいなかったからである。そのため、彼が図書館長として来任し、プールによって未完成のままに放置されていた業務の継承を義務づけられたとき、この辞書体という形の目録編さんに対してはすこぶる消極的である旨を明言している<sup>80)</sup> ことによっても、その間の消息を知ることができる。自然彼が、ボストン・アセニウムの館長に就任した1869年から、1876年かの著名な“印刷辞書体目録編成規則”，すなわち“カッター規則” (*Cutter's rules*) を完成・発表するまでの、その間における目録に対する彼の基本的態度は、上述のアルファベット順分類目録の枠から脱け出しておいての辞書体目録への接近、そしてついには、その“化身”とまで評されるに至った発展過程として捉えることができる。そしてその間に介在するものが、ボストン・アセニウムの所蔵目録5冊の編さん、ついでその編さん過程から生み出された“副産物”としての“カッター規則”である。

このボストン・アセニウム蔵書目録は、カッターが館長に就任して5年目の1874年に第1冊を、ついで1876・1878・1880・1882年と合計5冊、その間8か年を費して完成、前任者プールによる準備期をも含めると、前後20年にもわたっており、それに投入された経費 (人件費10万ドル、印刷・製本費2万ドル)・年数双方において、当時あってはどの目録にも見られないほどの大事業であった。すなわちこの仕事は、理事会の強い要望のもとで、プールの来任と同時に、彼が2年前 (1854) ボストン商業図書館のために完成したのと同じ方針のもとで推進して行くことが、すでに決定済みのものであった。そしてプールによってその仕事を命ぜられたのが数名の若い人々であり、しかし6か年を経た1862年に至っても、ほとんどはかばかしい進捗を見なかったのがその実情である。ために専任担当者として招かれたのが上述のローウェルであったが、彼の“完全主義”，すなわち細心・周到、加うるに学者気質の人物に共通な試行錯誤が長くつづき、ようやくその事業が軌道に乗りかかった矢先の1870年彼の急死という事態に見舞われることになった。それはカッターが館長として来任した翌年であり、彼みずからその目録編さんの直接担当者となったのも、実はこのような経緯によるものである。

この際‘カッターが受けとった遺産は、決して羨ましいものではなかった’<sup>81)</sup> としているその言葉は、この間の事情をよく伝えている。すなわち14か年近い歳月が費やされていたにもかかわらず

80) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 71.

81) *Ibid.*, p. 73.

ならず、この仕事は本格的には、ようやくその緒についたばかりで彼の手へ委ねられてしまったからである。一方またこの図書館の理事会は、目録の刊行に待ちくたびれ、カッターに対しては、直ちに印刷に付するよう責め立てるという有様でもあったからである。従ってこの1870年という年から目録第5冊の刊行を終った1882年に至る12か年は、カッターにとっては、まことに‘長い苦闘の歴史’<sup>82)</sup>でもあった。その中においても彼を最も苦悩に追いこんだのが、校正段階に至って、25万という膨大な数に上る“記入”(entries)に対して、訂正と変更を加えて行かねばならないことであったという。それというのも、この仕事にたずさわって来た上記の若い人々は、目録作業に関する限りにおいてはいずれも未経験者ばかりであり、書物からの正確な記述とその方法について、何んらの教育も受けたことはなかったからである。そのため時には書名を背標題や略標題からとって来たり、その中には、明らかに彼ら自身による“想像の所産”(imagination)に成るものもあるといった有様で、“省略”・“語の順序変更”・“難解の語を除いた形の短縮化”などは至極自在であり、著者名についても完全名の探索、別名を用いている書物についての本名の追求も行われず、結局カッターが仔細にその草稿を検討した結果では、新規に出直す以外には術がないという気持ちにさえ追いこまれるほどであったという。

このような“苦闘”の5か年を経て、第1冊がついに刊行され、単に国内のみならず、世界の目録史上においても画期的な意義を担うものとなり、ひいてカッターは広く図書館界に不朽の地位を留めることにもなった。すなわちこの目録はその構成において独自のものであり、出来栄もまたすばらしく、以前に試みられて来たどの目録に比しても最も野心的なものとして、人々の関心を引くところが非常に大きかったからである。いうまでもなくこれは‘完全な辞書体編成の見本’であるとともに、同時に‘目録作製技術の頂点’を示すものでもあったが、しかしそれ以上に重大な意義をこの国の目録史上に留める結果になった点が特に指摘されなければならないであろう。それはこの“カッター目録”に与えられた熱狂的な歓迎が、結局はそれ以後の目録作製の分野に、“辞書体配列の優勢”を保証する形をとったためである<sup>83)</sup>。すなわち分類目録もしくは辞書体目録の優越という問題を踏み越えて、その偉大な実績それ自体が、この目録の優勢を位置づける結果をもたらしたからである。このすう勢は引きつづき第2冊以降が隔年毎に刊行されて行くに伴っていよいよ拡大された許りではなく、第1冊から第2冊の中間期に、ついに“印刷辞書体目録編成規則”、すなわち“カッター規則”が公表されたことによって、それに一層の拍車をかけることになった。

この“カッター規則”は、1876年連邦政府教育局が、米国独立百年期記念事業の1つとして編さんし、政府印刷局から刊行された“米国公共図書館報告書”の第2部として別冊公刊されたものである。もっと直接には、フィラデルフィアを会場としたこの国における最初の国際博覧会における“図書館展示”(library exhibit)を補足する意図のもとで作製されたものであった。そ

82) “History of the long struggle” (Cutter, W. P.: *Ibid.*, p. 17)

83) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 42-43, 75.

してこの報告書の第1編は、この国における図書館の歴史、現状と運営の実際などをとりまとめた総覧であり、1,200ページに及ぶ膨大なものであるが、カッターはその第1部中においても“図書館目録”(Library Catalogues)と題して、約100ページ(p. 526-622)にわたり、当時この国に存在していた各種の目録を中心に、その長所や短所などについて論じた総合的な叙述を試みている。それ自体まことに緻密な論稿ではあるが、しかしそれ以上に重要な意義を留めたのが上記の規則であり、実際には1年前の1875年、上記“報告書”の第2部とする企画のもとで、すでにその印刷を完了していたものであった<sup>84)</sup>。従って時期的にいえばこの“規則”の実質的完成は、ボストン・アセニウム蔵書目録第1～2冊刊行の中間期に位置する。そして両者の関係について言えば、この規則は正しく、‘蔵書目録の編さん・刊行というカッターに課された仕事’からの所産であった。この間の仔細な事情に関連して、カッターという人物は、ただ盲目的に仕事の進捗を図るといった性格の持主ではなく、事を行うにはまずその輪郭の決定的な姿を描き、それを完了した上で、将来のためにその詳細をさらに正しく記録し、しかる後に事業の推進に傾倒して行く、その点きわめて慎重であった彼の為人が伝えられている。このことは、“規則”そのものの完成・印刷は1875年のことであったとしても、草案自体は、目録第1冊の原稿作製に先立って、すでに成案に到達していたことを推察せしめるものである。

カッター自身はその当初、辞書体をとる蔵書目録の編さんに対しては、きわめて消極的であり、従ってそれを不本意とする明らかな態度をとっていることについてはすでに言及した。それにもかかわらず、自らその業務を担当せざるを得ない立場におかれ、編さんに必要な“規則”を整え、それに基づいて目録の第1冊を刊行し終った頃には、すでに彼は完全なる辞書体目録の擁護者となっていた許りではなく、更にその目録が人々の絶賛を博するに至って、ついには辞書体目録のあたかも“化身”であるかの如く見なされるようになっていったと解することができる。そして同時に、単にそれを目録の作製に必要な“規則”とするに留めず、ここで目録法の基本的原則をまとめ、それを体系化し、組織的に提示しようとする積極的な意欲がその中には見られる。

この間の経緯についてカッターは、この“規則”初版の序文(*prefatory note*)において、目録規則についての歴史的概観を試み、著者目録についてはパニッチィの“91か条”、1852年ジュエットがそれを修正して作製したもの、同じく1869年パーキンス(Frederick B. Perkins, 1828-1899)の修正になるもの、最後にエドワーズ(Edward Edwards, 1812-1886)の大著“図書館覚え書”(Memoirs of Libraries, 1859)第2冊に収録されている1つの章(“Catalogues in general”を指すものと思われる)に言及したあと、辞書体目録のことに筆をすすめ、‘全体としても、またその大部分のためにも、この目録のことについて書かれたマニュアルは全く存在しない’こと、それだけではなく、上記の諸文献中のどれとて、実は目録規則を組織的、体系的に提示しようとする試み、ひいては“目録法の第一原則”(first principles of cataloging)ともいうべきも

84) Cutter, W. P.: *Ibid.*, p. 24.

のを討究して行こうとする努力さえ行われていないことを指摘して、彼自身のこの“規則”が、従ってその意味においては“最初の試み”であり、自然不完全であることを免れ得ないもの、ために広く図書館人の批判・反論・新たなる問題提示を得、それらの示唆をとり入れた上での第2版こそが、始めて“規則”という標題に値するものになるであろうと記している。おそらく Cutter は前任者プールの失敗を反省してその轍を踏まず、目録作製の予備段階において、詳細に検討を加えて草案を完成し、第1冊の刊行後、なお推考を必要とする多くの課題に解決を与えながら、目録法の第一原則を踏まえた形の辞書体目録編成規則の体系化を指向した結果が、“Cutter 規則”として結実するに至ったとみなすべきであろう。なおプールについて言えば、彼は成文化した規則も、また定った件名標目表も持たないままで、ボストン商業図書館の印刷目録ならびに“雑誌索引”(Poole's Index)の編さんを成し遂げて来た体験から、こうした仕事の遂行は、常識と知性に信拠するものとの考えに立ち、自然彼には、記入の規則・記述の詳細・主題の名辞化などが慎重に決定され、かつ明確に指示されてこそ、始めて統一・一貫・完全性が期待され得るという点についての見極めが至って稀薄であったことが指摘されている<sup>85)</sup>。

## 7

“Cutter 規則”は、1876年の初版(89 p.)では“印刷辞書体目録編成規則”であり、発行数は500部、第2版(133 p., 1889)以降においては、標題中から“印刷”(printed)の文字が削除されている。これは単に印刷目録用としてではなしに、カード目録に対しても同様に、この規則が適用されて行ったその実績によって、事実上この語を冠することを無意味としたことに基づいている。そしてこの第2版の発行部数は一躍初版の5倍で2万、この数はCutter 生存中(1903年9月3日死去、従って同年刊行の第3版第5刷まで)の総発行部数3万5,000に対して6割という大きな比率を占めている。第3版(140 p.)は1891年の発行でその間わずか2か年、1880年代の終りから90年代の始めにかけて、この“規則”が如何に多くの図書館・図書館人の求めるところとなったかを想察することができる。それはとりも直さず、他の図書館における辞書体目録刊行の盛行を意味しており、ペティも、1890年代まで、またこの90年代を通じて、印刷辞書体目録が数多くつくられて行った事実を、Cutter によるボストン・アセニャムの蔵書目録が刊行されたことと、つぎにはこの“規則”の完成とに帰し<sup>86)</sup>、ウィリアム・Cutter もまたボストン・アセニャムのものが、他の多くの辞書体目録の模範となって行った事情を伝えている<sup>87)</sup>。

ランツも記しているように、ボストン・アセニャム蔵書目録の完成は、たしかにCutter 個人に具った‘目録的天才の顕著な証跡’<sup>88)</sup>には違いないであろうが、彼における辞書体目録との出

85) Williamson, W. L.: *Ibid.*, p. 34.

86) Pettee, J.: *Ibid.*, p. 33.

87) Cutter, W. P.: *Ibid.*, p. 20.

88) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 73.

会いは、いわば全くの偶然であり、もともと彼が強く心を引かれていたのは、すでに言及した通り、アルファベット順分類目録の方であった。もっと具体的には、彼自身その編さん業務に従って来たハーバート大学の目録、すなわち“アボット方式”<sup>89)</sup>である。このアボットは、1856年ハーバート大学図書館長補佐 (assistant librarian)・目録部主任となり、1872年神学校 (*Divinity School of Harvard University*) の教授 (*Bussey Professor*) となってその死去に及んだ人であるが、結局カッターをして、図書館人としての生涯を踏みしめるそもそもの機縁に培った人がこのアボットであった。彼によってつくられたハーバートの目録は、やや小形 (2×5 in; 約5.08×12.7cm) のカードを用いたものであり、おそらくこれがアメリカでは閲覧用目録にカードを用いた最初であろうという<sup>90)</sup>。この目録は、著者および主題配列をとる2つによって構成されており、主題配列をとる方について言えば、この目録は、全体としてはアルファベット順をとりながら、しかしその内部が類集方式をとっているという二重の性格から成るものであったため、時には“混合・中間方式” (“mixed” or “half-way” system) とも呼ばれていたものである。これに対してカッター自身は、その内容をより正確に示す言葉としてはむしろ“アルファベット順・分類” (“*alphabetico-classed*”) の語が適切であると語っている<sup>91)</sup>。ペティによると<sup>92)</sup>、いずれにしてもこのアルファベット順分類目録は、要するに分類目録に‘辞書体の胚種’ (*dictionary germ*) を接種してできた重要な変種であり、しかもその萌芽に培ったのが、同じくハーバート大学の図書館において1790年に刊行された目録<sup>93)</sup>で、このアボットのものは、およそ70年を経て、それを完全に展開した形のものであるという。この目録はアルファベット順をとる大きな主題 (64個)、すなわち類 (*classes*) と、その中でさらにアルファベット順に配列された小主題 (*subtopics*) の下で、個々の図書を著者のアルファベット順に配列したものである。アボット方式については、カッターがアボット自身の言葉として引用している次のものによってその輪郭を知ることができる。類、すなわち主題の配列はアルファベット順であり、従ってそれは科学的なものではない。しかしそれが“辞書体配列” (*dictionary scheme*) と異っている点は、類すなわち主題の大部分は、多数の細目 (*subdivisions*) をもっている点であり、“大きなアルファベット順連続”によって、書物を散乱状態においてしまったり、大きく相互に引き離したりすることをしないよう、包括的な標目 (*general head*) の下で、第二次的なアルファベット順をとって配列される<sup>94)</sup>。

すなわちアボットは、一つづきのアルファベット順形態が、同一および親縁関係の主題図書を大きく引き離したり、散乱状態におくことの不合理を是正するために、大小の標目主義を採用し、二重の形における語順配を執ったものである。

89) “Abbot System” (Cutter, C. A.: *Library Catalogues*, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 540)

90) Cutter, W. P.: *Ibid.*, p. 14.

91) Cutter, C. A.: *Library Catalogues. Public Libraries in the United States of America*, p. 540.

92) Pettee, J.: *Ibid.*, p. 38.

93) *Catalogus bibliothecae Harvardianae cantabrigiae Nov-Anglorum* (Boston: Typis Thomae & Johannis Fleet, 1790) のこと (Ranz, J.: *Ibid.*, p. 25, 105)

94・95) 91)に同じ。

カッターは、このアルファベット順分類目録と辞書体目録とについて、‘私が2つの目録を15か年にわたり、絶えず使用して来たところでは、その双方を理解している人々にとっては、便宜という点ではほとんど差異がないという確信を抱くようになった’と記している<sup>96)</sup>。1876年の言葉であるが、ここでいう15か年とは、1860年からハーバート大学において、アボットを助けてアルファベット順分類目録の作製に従事して来た8年間と、そのあとボストン・アセニウムに移って、辞書体目録の編さんに携ってからの7か年を合した年数を意味する。従って彼のいうアルファベット順分類目録とは、要するに“アボット方式”のものに外ならないが、この方式が、広範囲の主題を徹底して調査して行く場合には最も適したものであり、一方、また辞書体方式も人物・場所あるいは他のトピックに関係する事柄を、迅速に探索する場合には最も優れた組織であるとして、両者の間には優劣をつけ離く、要は1つのプランだけに慣れている人にとっては、他のプランは不便・不完全・不出来なものとして受けとられ、目録の使い易さというものは、非常に大きく“習慣の問題”(a matter of habit)に帰せられるとしながら、そのどちらについても知らない人々に関する限りでは、辞書体ははるかにその理解が容易であり、分類目録のように、一見もってためらいを覚えずにはおれないような複雑な体裁をもっていない点で、大きな長所を担うものであることを強調している。

ペティによると、彼女がこの国における第2番目の図書館学校(*Pratt Institute Library School*, Brooklyn, N. Y. 1891年創立)に学んだ当時(1894—95)にあっては、なお若干の図書館ではアルファベット順分類目録が行われており、自然図書館学校における教科の1つをなしていたという。しかしながらそれもまた辞書体目録が、結局は蔵書に接近して行くための標準方法(*standard method of access*)にまで発展して行くに伴って、やがてその存在価値を薄くし、さらにその前の段階に在った分類目録の如きは、ほとんど完全にその姿を消して、わずかに限られた専門図書館のみのものとなってしまったことを伝えているが<sup>96)</sup>、ヘィキンが1951年当時、主要な分類目録で残存しているものとして挙げているのは、ニューヨークの工学協会図書館(*Engineering Society Library*)、シカゴのジョン・クレラー図書館(*John Crerar Library*)、ピッツバーグ(Pittsburgh, Pa.)のカーネギー図書館(*Carnegie Library*, その中の科学・技術部)であり、彼は分類目録がこの国においてほとんど衰退の運命をたどってしまった理由として、分類目録には索引が必要であること、そしてまた図書館を利用する大部分の人々が、容易には理解出来そうもない“符号”(symbols)を敬遠して来た事実に戻して、同じ主題目録ではあっても、“符号”よりは“ことばの標目”(verbal headings)を用いるアルファベット順件名目録、それを内包する辞書体目録に大きく傾斜して行った事情を伝えている<sup>97)</sup>。

96) Pettee, J.: *Ibid.*, Preface.

97) Haykin, D. J.: Subject headings: a practical guide. U. S. Gov't. Printing Office, 1851. Preface.

デュイは1876年、辞書体方式 (dictionary plan) は、学者の要求には到底応じ得られないことがしばしば指摘されて来ていること、そして結局すぐれた分類目録のもつ絶大な優越性については何人も疑うものはないと、極めて断定的な表現をとっているが<sup>98)</sup>、ランツはこの言葉をうけて、辞書体方式 (dictionary method) は、論理的分類のどのような要素をも持ち合わせていないという点で、つねに強い制約のもとに置かれている以上、すぐれた分類目録には大きく劣るものとデュイは深く信じ、決してそれを疑わうともしなかったと記している<sup>99)</sup>。事実彼は、1885年その分類法第2版の刊行に際して、‘年毎に積み重ねて行った体験と研究とによって私は、一般の辞書体目録は、分類目録に劣るものであるという確信をいよいよ大きくするようになった’<sup>100)</sup>とのべている。すなわち辞書体目録が非常な勢いで普及しつつあった中においても、分類目録への強い信託性に支えられていた姿を見ることができる。この信託性こそが実はデュイ分類法の根源に培ったものであり、彼がアマスト大学図書館にすぐれた分類目録を新たに加えて行こうとしたとき、彼に課された仕事は、旧来の分類目録に改革を加えること、ひいてはそのために必要な分類法の考案というきわめて明白な姿をとって現われることになった。1876年に一応の輪郭を得た彼の分類法は、アマスト大学への適用を前提にしての彼自身の解答にほかならない。

この分類法の初版は、その標題を“分類法と主題索引”<sup>101)</sup>としていることでも明らかのように、主題分類表と、それに対するアルファベット順主題索引との2つを本質的要素として構成されている。しかしながらデュイがその分類法を通じて成し遂げたユニークな貢献は、表そのものの構成にあるのではなくて、むしろそれに添付するものとして考案した“記号方式”(notation system)の採用であり、従って彼の分類法は、類・綱・目…を表示する十進記号(decimal notation)による“網状組織”(network)を形成している<sup>102)</sup>。また“主題(相関)索引”について言えば、すでに触れたように、デュイ自身これをもって彼の分類法における最も重要な特徴に掲げているほどであって、初版でとり上げられている主題項目数は2,600(42 p.のうち18p.)、これらは当時存在していた蔵書目録および各種の書目・書誌類の中から摘出採録したものである。そして各主題項目に付与されている数字は、彼の場合、その主題関係図書の日録中に占めるページ数でも、またその書物が現実に配架されている書棚(shelf)を指示する数字でもなくて、その主題を内容とする図書は、彼の分類表中においてはどこに置かれているかを示すものである。そればかりではなく、その記号はそのままに図書記号の基本要素として使用され、それがまた同時に、書物の実在個所を決定する。要するにデュイは、アラビア数字という単一記号に対して、書物の内容を明らかにする機能と、同時にまた書架上におけるその所在個所を示す機能との2つを付与したも

98) Dewey, M.: A Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 635.

99) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 82.

100) Mills, J.: *Ibid.*, p. 57.

101) *A Classification and Subject Index*.

102) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 82.

のである。

ミルズ(J. Mills)が、デュイ分類法出現のことに関連して、それがもつ重要な意義は、ただ館内資料の組織的配列を可能にする準備を整えたことにあるのではなくて、むしろそれとは別の2つの面において、それ以前の分類法にまさる“偉大な前進”をなし遂げた点に存することを指摘している<sup>103)</sup>。すなわちその1つは、分類法の体系(systematic order)が、きわめて単純な形を執りながら、しかし高度の融通性をもつ記号法(notation)によって機械化されて行ったことであり、他は包括的な相関索引の添付である。そして分類体系の機械化はそのまま分類作業の機動性に関連し、ひいては、伝統的な配架法であり、すでに当時の実情からは背離して久しい固定式に替っての相対的配架法の原則を推進して行く上に大きな役割を担うことになった。また相関索引は、分類目録が背負って来た2つの大きな難点、すなわちどこに分類するか、またどこを探したらよいかを正確に知ることを不可能なままにして来た不利な条件を解消する道を開いて行くことになった。事実この分類法の公表に伴って、相ついですぐれた分類目録がつけられて行くことにもなった。しかしながらこの国の目録界は、デュイの影響による分類目録の一時的な再興の時期を、このようにして迎えたにもかかわらず、結局は再び衰退の道をたどって行ったのがその後の実情である。しかもウィアー<sup>104)</sup>の語るところによると、1889年デュイが、ニューヨーク州立図書館長に就任と同時に、新しくこの図書館においても分類目録を開始したその年以来、館界の風潮は、きわ立って分類目録からは遠ざかって行き、辞書体目録の方向を目指して進むようになったという。果してこの州立図書館に新しく分類目録が開始されたことと、そのあとこの目録の衰退に一層拍車があったこととの間に、直接何んらかの関連があったか否か、いまそれを知る由もないが、いずれにしても1889年頃は、再び訪れて来た分類目録の大きな転換期であり、この姿は、その前年デュイが、辞書体目録の盛行を一時的な流行と断じ、いずれはまた分類目録の本質的優越性を回復する時期が訪れる旨を明言した既述の言葉とは、著しく背馳する方向をたどることになった。

分類目録に関する限りにおいては大要上述の如くであり、このことは、すぐれた分類目録の作製を第一義的とし、そのための規矩として創案された彼の分類法は、そのそもそもの企図を館界一般の風潮に反映させて行くという点においては、終にその成功を見るに至らなかったことを意味する。いまこの間の消息を仔細にたどることは、差当っての課題ではないが、分類目録を好まなかった Cutter が語っている(1889年)次の言葉は、たしかにその原因の一端に触れるものがあるであろう<sup>105)</sup>。

書架上における図書を体系的に分類し、その上さらに目録の中においても、同一体系に基づいて、それら

103) Mills, J.: *Ibid.*, p. 57.

104) ウィアーは、デュイが1906年ニューヨーク州立図書館長の地位を去ったあと、アンダーソン(Edwin Hatfield Anderson, 1861-1947)について館長(1908-'26)となった人(Petee, J.: *Ibid.*, p. 35)

105) Cutter, C. A.: *Common sense in libraries; address of the President...*, *Lib. Jour.* XIV (1885), p. 153 (LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 215). Cutter は1887-89アメリカ図書館協会の会長であった。

を分類して行くことは、常識的に言っても、非常に賢明な処置であるという印象を私には与えない。そうすることは、目録というものを単なる“美化した函架目録”(glorified shelf-list)としてしまうことである。われわれは、例えばアルファベット順にした主題配列といった具合に、異った体系で目録を編成することによって、違った種類のインフォメーションを得ることができるのに。

しかしながらアメリカの図書館界が目録作製の分野において、以上のような経過をたどって行ったとしても、それはなんらデュイ分類法の意義を失わしめたことを意味しない。それどころか、分類法それ自体は急速に普及し、1899年(第6版)における発行部数7,600というその数は、デュイ生存中のものとしては、1927年の9,340部について第2位を占めている。すなわち分類目録の普及という問題とは無関係に、別の面において彼の分類法は、真に“革命的”(revolutionary)な役割を果たしつつあったからである。ペティはこの革命的という言葉に関連して、デュイのものは要するに、“相対式分類法”(“relative” scheme)であり、従ってそれが急速に普及して行った結果、千年という齢を重ねて来た伝統的な方法、すなわち“固定式書架配架法”(fixed shelf location)が変革されてしまったその意義を強調している<sup>106)</sup>。すなわちこれは目録の問題ではなく、書架上における図書そのものの実際配架に関する事柄であり、この面に果して来たデュイ分類法の役割が余りにも大きかったために、あたかもこれは始めから書架上における図書の実際配架に適用する目的で考案されたものであるかの如く受けとられて行くようになった。フェローズによっても、デュイ分類法のもつ意義は、それが広く国際的に普及して行ったこととはまた別に、本質的な点からいえば、‘当時ほとんど普遍的に行われていた書架上における固定式配架法を相対的配架法の原則に置きかえてしまったこと’である点が指摘されている<sup>107)</sup>。すなわちすぐれた分類目録を作製して行くことをもって第一義的として創案されたデュイ分類法は、その結果から言えば、その当初の企図とは全く別の面において、却って大きな意義を歴史の上に留めて行くことになった。ラモンターンが、‘デュイ自身にとってもそれは全く意外な成り行き’であり、‘皮肉な’結果をもたらしたとしている<sup>108)</sup>のはこの間の事情に言及したものであり、ランツはまたそれをもって、“デュイ分類法の貴重な副産物”<sup>109)</sup>とみなしている。

9

ペティは、デュイ分類法における記号(notation)は、分類目録に対すると同じように、書物それ自体にも適用できる点が、この分類法のもつ利点の1つであることをデュイ自身が強調している事実を挙げて、これを“相対的分類表”と呼び、それが書架・書棚ではなしに、書物そのものを分類するという“新しい考え方”に立脚していること、そしてこれはすでに2・3の進歩的な図書館人がすでに試みつつあったものに外ならないが、しかし、図書の相対的配架という歴史

106) Pettee, J.: *Ibid.*, p. 23.

107) *Lib. Jour.* Vol. 57 (No. 3), 1932 (Feb. 2), p. 152.

108) LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 7.

109) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 83.

的な変革をもたらしたものは、デュイ分類法の急速な普及によるものであることを指摘している<sup>110)</sup>。デュイ自身は、固定式・可動式という表現を採らず、絶対式 (absolute) に対して相対式と呼ぶ旨を断わり、同時にこの相対的配架法が全く新しい考えであると主張するものではなくて、それはすでに他の図書館において用いられても来、さらにはまたすぐれた図書館人によってその価値が大きく認められているものであると記している<sup>111)</sup>。おそらくは、プールによってすでに1851年頃に試みられた事績などを意識しての言葉であろう<sup>112)</sup>。そして彼の分類法は、‘相対的配架法のあらゆる利点をもまたそなえたものである’としているその言葉は、彼のものはその発端においては、すぐれた分類目録をつくる方向を志向したものであったとしても、同時にまた絶対(固定)的配架法がもたらしている不利を除去する企図をも含めて作製されたものであったことを意味する。そしてこのこと自体も、アマスト大学図書館における図書配架の実際にその源を発し、ついで多くの図書館の実情を調査した結果、その間普遍的に存在する課題として、この問題が彼の前に大きく立ちはだかって来たからに外ならない。

デュイは自身、50を越える図書館を直接訪問し、そこで実際に採用されている方法を総合的に検討し、その上で満足すべき解決策を日夜探し求め、いろいろに夢想し続けたことを再三にわたり回想し記述している。そして彼における“アマストの夢”というのは、そのような集中的な思索のあと、ついに“十進法の美しさ”が鮮やかに描き出されて来、それをを用いての新たな分類法の開発、またその採用によって展げて行く図書館の新しい世界を夢見た、アマスト大学礼拝堂内に在っての、ある“忘れ得ぬ日曜日”<sup>113)</sup>の幻想を指している。

デュイが歴訪したのは、‘新英州およびニューヨークの諸図書館’あるいは‘アマストに近いしかもすぐれた図書館’と記されているが<sup>114)</sup>、その中にはボストン (Boston, Mass.)、ハートフォード (Hartford, Conn.)、プロビデンス (Providence, R. I.)、オールバニー (Albany, N. Y.)、ニューヨーク市などの地名が含まれている。また時期的に言えば、ニューヨーク州立図書館 (オールバニー) の訪問は、1873年4月1日のことで、ここでは書物がもつ主題についての考慮は全く払われておらず、蔵書はただアルファベット順 (精密な著者順) に配列されていた事実を伝えている<sup>115)</sup>。このように中には1873年にわたっているものもあるであろうが、しかしこれらの図書館訪問は、いわゆる“アマストの夢”に到達する前提としてつねに回想されており、自然その多くのものは、1872年中のことと見なすべきであろう。デュイはこの図書館歴訪のことについて、

110) “Dewey’s ‘relativ’ scheme” (Petee, J.: *Ibid.*, p. 23)

111) Dewey, M.: A Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 635.

112) 拙稿: 図書館資料の蔵置形態とその分化 京都大学教育学部紀要第8号 1962年3月 p. 140. なおデュイは相対的配架の実績をすでに持つところとして、シンシナーティ、シカゴ、セントルイス、それにサン・フランシスコの4つを挙げている (Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 174)

113) Shera, J. H.: *Libraries and the organization of library*. Lond., Crossy Lockwood, 1966, p. 88, 151.

114) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 48, 111.

115) *Ibid.*, p. 158.; Richardson, E. C.: *Ibid.*, vi.

50に余る図書館を訪ねて、その蔵書が、昨日・今日そして永遠に所属すべき類・綱・目によってではなく、たまたまその日に置かれることになった特定の部屋・書架・書棚に従って番号が与えられて行く方法、すなわちほとんど普遍的に採用されている固定式 (fixt system) の故に、絶えず目録のとり直し、分類の訂正を行わねばならない必要によって、運用上の能率を欠き、時間・経費を浪費している実状を発見して驚倒する思いであった

と記し<sup>116)</sup>、その間、彼の関心を最も強く捉えたものが固定式配架法であったことを伝えている。ラモンターンによっては、デュイにおけるそれら図書館の訪問は、何か月かの間、まず文献の上でいろいろと研究を重ねたあと、‘図書館整理に関する直接の情報を求め’んがために外ならなかったこと、しかし彼がもともと関心を抱いたのは目録および索引作製のことであったにもかかわらず、ほとんどすべての図書館が固定式に準拠している事実を発見したその驚ろきが、結局デュイの方向を大きく変えてしまい、“それから以後”デュイは、何か月かにわたって‘無数の図書館が抱いている問題に解決を与えて行くことになるであろう、よりよき方式を創案することを夢みるようになった’と記している<sup>117)</sup>。この言葉は、具体的には2つの面において、その時以前と以後との間には、根本的な変化がデュイの上に訪れて来ていることを指摘したものである。すなわちその1つは、図書館歴訪の目的は、その当初においては、自分が勤務することになったアマスト大学図書館のために、改善に必要な示唆を、他の図書館における実情から求めんがためであったのに対して、訪問後に在っては、自分の大学図書館をも含めて、広く図書館全体の共通課題に取り組んで行くようになったこと、もう1つは、もともと彼が関心を抱いた事柄は目録面についてであったにもかかわらず、同時に、それとはまた別個の書架上における図書の実際配架の問題に移行して行ったことである。

デュイは1920年、彼の分類法の起原に触れた一文の中で、上記図書館歴訪から得た驚ろき、同時にそれぞれの図書館が全く別個の方法で分類・目録作業を行っていることの不経済と、労力の重複による無駄とに触れ、これらは然るべき中央機関において、1,000個の図書館に対する業務をも一挙に果すことが可能である点に言及した後、実は‘すばらしい可能性についての幻影’がひらめいて来なかった訳ではないが、しかしそれらは非常に大きな経費を伴うものであったため、それを必要としない別個の方法についての思索を自然たどる結果になった経緯に言及している。そして何か月かの間‘私は、夜となく昼となく、どこかに満足すべき解決策があるに違いないと考え、それを夢に描いた’とのべている<sup>118)</sup>。すなわち彼の思索を支配していた事柄の1つに、特別の経費を必要としない形での解決策という課題があったことを物語るものであるが、それと同時に、非常に勢いで増設されつつあった当時の図書館、その反面、これらの図書館において分類業務に携って行く人々に、高い技術と教育・研修を要求することの困難な実情が彼の意識を強く支配している。‘解決策の先要条件となるものは、最大限に、能う限りそれは簡単なものであ

116・118・120) Dewey, M.: Decimal Classification beginnings. *Lib. Jour.*, Vol. 45 (No. 4), 1920 (Feb. 15), p. 152.

117) LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 179.

らねばならない’としているのは、上述のような事情をその背景としているからである。そしてこの簡単ということに関連して彼は、‘a, b, c のごとく簡単に’という諺のあることを引用し、しかしそれよりももっと簡単なものと言え、それは 1, 2, 3, であるという考えから、分類法の記号としては、このアラビア数字を使用するという構想が逸早く彼の脳裏には浮び上って来た事情を伝えている。すなわち十進法という考え方は、むしろその後には到達したものであり、おそらく両者の間には、2・3か月の時間的間隔が介在してのことであろう。すなわちデュイの文面は、まずアラビア数字のことに言及し、ついで‘何か月の研究のあと’という言葉を含んで十進法の問題に触れる叙述をとっているからである。

実はデュイ自身における彼の分類法創案の時点とされているのは、この2つのものの結合、すなわち‘アラビア数字を十進数字’として使用するという‘arabic decimals’の構想が描き出されたその瞬間であって、しかもその創始の年を1872年としているところから、おそらくはこの年もすでに押し迫ったところと推定される。いずれにしてもデュイ分類法は、それ以前のものとは異って、その形成過程の最初に位置するものが記号法の設定であり、主類以下、分類項目の選定は、その後の段階における課題であった。しかしながらカスターもすべてにように、‘簡単な記号法による分類法の考案という課題は、分類項目の配列企画を樹てること以上に、はるかに困難なものであったであろう’し、それは‘哲学的分類のどれとて実は試みたことのないもの’であった<sup>119)</sup>。この間の消息は、いわゆる“アマストの夢”に到達し得た時、すなわちデュイにとっては、その生涯における最も感激的な瞬間として、再三にわたり回想され、繰り返し記述されているつぎの言葉によって汲みとることができるであろう。

それはある日曜日のこと、その時は大学総長スターンズ (pres. Stearns) による、長い説教が続けられていた。一方私自身は、その総長の顔をデット見つめてはいたものの、実のところ一語とて彼の言葉を聞いていた訳ではなかった。私の心は緊急な課題に奪われたままであったからである。解決策がひらめいたのはその時の瞬間であり、ために私は、あやうく椅子から飛び上って、“ついに見つけた”とばかり叫び出しそうになったほどである。そしてその解決策というのは、まず印刷の形をとるあらゆる人間知識の分類に数字を与えて行くために、最も簡単なものとして知られているアラビア数字を、零の普通の意味をも含めて、十進数字として使用することにより、一番簡単なものを得るということであった。さらにはまた、このアラビア数字について簡単な a, b, c をもってその補いとし、それを分類表中のあらゆる項目への索引に用いるということであった。このように分類項目への手がかりさえ設けておけば、30ないし40の項目をもつ普通の分類表を使用するよりは、1,000項目をもつものであっても、却ってその使用が容易になるであろうという理由からである。それというのも、この場合には、その使用に先立って、予め注意深くその分類表について研究しておくことを必要としないからである<sup>120)</sup>。

すなわちデュイ分類法の創案というのは、デュイ自身においては、直接にはアラビア数字の十進法的使用による分類記号の構成、付随的には、主題(相関)索引の作製に関する構想への到達にあったといえることができる。

119・121) Custer B. A.: Dewey Decimal Classification and Relative Index. 16th ed., 1958. *Editor's Introduction.*

カスターによると、このような形での解決策は、‘インスピレーションの一瞬’として訪れて来たという<sup>121)</sup>。またシェラは、アマスト礼拝堂におけるこの“忘れ得ぬ日曜日”に、デュイは‘始めて十進法の美に目覚めた’とも記している<sup>122)</sup>。このような表現は、もちろんその情景描写に付随しての単なる言葉の“あや”にすぎないであろうが、しかしながらデュイの場合、アラビア数字に対する異常な関心は少年時代に、また十進法についてはメートル法を通じて、それよりもさらに早い時代から培われて来たものであった。デュイ分類法独自の性格はその形成過程の中に彼のもつこのような背景が大きく入りこんで来ている点に帰せられるところが少なくないであろう。

デュイが“メートル法の使徒”となったのは、彼がまだその生れ故郷であるニューヨーク州北部の寒村アダムズ・センター (Adams Center, Jefferson County) に居住していた15歳のときであり、“メートル法の美しさ”<sup>123)</sup>に心引かれて、彼は生涯を通じてその啓蒙と普及とに異常な努力を傾けている。従って“十進法の美”を、彼の分類法における基本的要素として採り上げて行ったことをもって、単に一瞬の着想と見なすことはきわめて皮相な解釈と言わねばならないであろう。

十進法という点についていえば、デュイはこの方法が、人間の生理的構造に由来する点をあげ、人間が手の指、そして足指をもつ限りにおいては、十進法が用いられて行くであろうし、……メートル法は、世界全体に対する‘数量の万国語になって行くであろう’<sup>124)</sup>と記している。すなわち十進法という考え方は彼の場合、その単位系であるメートル法と一体であり、それが“万国語”であるという点でも、またアラビア数字と結びついて行く形をとっている。メートル法との直接の関係については、いま詳しくは触れないが、彼は1876年における“メートル法普及会” (American Metric Bureau)の事実上の創立者であり、1877年頃には“アメリカにおけるメートル法の主導的な使徒”としてヨーロッパ人の間にもすでにその名が知られている<sup>125)</sup>。自然彼は“10”という数字に対する異常な愛着の持ち主であり、その言動の上には、明らかにこの数字を意識したものが少なからず見受けられる。このことに関連して彼は晩年 (1927)

私は10という数字を愛好する。おそらくそれは、私が十進数字 (decimals) を堅く信ずるが故であろう。

事実私は、生涯を通じてのその擁護者であり、また積極的な宣伝者でもあった<sup>126)</sup>

と記し、同時にまた‘十進数字はわれわれの偉大なる労力節減者であるが故に、その数字に対して私はきわめて忠実である’ともべている。この言葉は、彼が75歳 (1927) の誕生日を迎えた

122) Shera, J. H. *Ibid.*, p. 103.

123) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 35.

124) *Ibid.*, p. 280.

125・129) “Leading American apostle of the metric system” (*Ibid.*, p. 279)

126・127) *Ibid.*, p. 107.

とき、祝辞を寄せて来た多くの知友にあててしたためた書簡中の一部であるが、さらにその中で、  
 ‘古い習慣では、男には6時間、女には7時間、子供には8時間、そして馬鹿には9時間という  
 のがあるが、…私はきちんと10時間毎に睡眠をとりたいたいものだ’とさえ付け加えている。実のと  
 ころ彼が生まれた日も10日（1851年12月）であったが、しかも12月10日というのは、それより52  
 年前の1799年、パリの西南セーブル（Sèvres）の宮殿地階にメートル原器が納められた日でもあ  
 って、デュイは‘私の生れた日が、世界のメートル法が事実上誕生した記念すべき日’に連なる  
 ことを喜びとし<sup>127)</sup>、また彼が分類法を創案した年としている1872年は、国際メートル委員会に  
 よって、メートル原器作製上の手続きや、その測定法などについての具体的な決定が行われた重  
 要な年として、それとの結びつきにおいて回想されている。そのほか、1876年彼が6か年間にわ  
 たった最も思い出の深い“アマスト時代”にいよいよ終止符を打ち、その大学を去ってボストン  
 に赴く日として選んだのもまた10日（4月）であった。

またアラビア数字に対する特別の関心は、直接には“ローマ記数法”（Roman notation）の不  
 便と煩わしさに対して抱いた彼自身の抵抗に深く根ざしているように思われる。1870年（18歳）  
 の4月といえば、アマスト大学に入学する5か月前であり、デュイはその生れ故郷を離れて、ア  
 ルフレッド（Alfred, Allegang County, N. Y.）で、大学の入学準備にすごしていた時であるが、  
 ローマ記数法について、それを、‘生涯必要としない厄介もの’（life’s unnecessary nuisance）  
 と呼び、つぎのようにのべている。

ローマ記数法の組織そのものは、構造の面でまことに始末の悪い（awkward）ものである。そればかりで  
 はなく、計算を急ぐ場合の使用にはほとんど役に立たない。他面われわれはアラビアの、換言すればインド  
 の記号法の中に、正確・簡単、そしておそらくは人間の発明し得るものとしては、まず完全と思われる数  
 字記述の方法をもっている。ローマ記数法が始末の悪いもので、まぎらわしく（ambiguos）、それに慣れ  
 るよう、人々を十分仕向けて行く限りにおいてのみ使用することができる性質のものであるのに対して、  
 アラビア記数法の方は、簡単で正確である。このアラビア数字を専ら使用することにしたら<sup>128)</sup> …

と。すなわち彼は、“アラビア数字を用いての十進法”という形で、一応の解決点を見出した  
 1872年に先立つ2年前、すでに‘アラビア数字のもつ魅力と価値’について、深い認識を抱いて  
 いたことを物語るものである。すなわちデュイにとってアラビア数字は、‘世界が今日までに知  
 ることの出来た最も偉大な労力節約者の1つ’、同時に国と国語とに超越した数量をあらゆる国  
 際語（universal language of quantity）であったが<sup>129)</sup>、1876年彼は、分類記号として、専らこの  
 アラビア数字のみをとる純粋記号法を採択するに至った理由について、

アラビア数字は、書く上でも、また見出す場合においても速く、他のどんな符号よりも、混乱や間違い  
 を起す危険性の少ないものである。そのため分類法に普通見出されるローマ数字は、大文字、小文字を問  
 わず、またそれと類似の記号もすべて廃棄される。そして書架（shelves）、分類、索引、目録、記録のす  
 べてにわたり、アラビア数字をその正しい順序に、かつ包括的に使用することによって、絶大な確実性  
 （accuracy）、経済性（economy）、そして便宜（convenience）が確保される。この利点は、著者名および

128) *Ibid.*, p. 43.

書名を、書物を請求したり、借り出したり、さらには参考したりする場合に書きこまなければならない方式と比較した場合には特に顕著である<sup>130)</sup>

と記している。そして1877年ロンドンにおいて開催された国際図書館人会議 (World Conference in London) において、国際語 (international language) の問題が討議された際、“ある権威者” (an expert) が、‘DC ナンバーのみが、完全に決定的な意味をもって、すべての文明人の間に知られている唯一の言語である’ と発言したことを伝えている<sup>131)</sup>。

以上はデュイ分類法においてはその根幹となった記号法、そしてアラビア数字・十進法という形での解決策が、決して偶然的なものではなかったとする立場からその背景を探究したものであるが、この数字上の枠組みを終った後の分類項目の充当についてデュイは、‘分類表の9個の類を埋めて行くに当っては、セント・ルイス図書館の逆ベーコン式の配列がたどられて行った’<sup>132)</sup>とも、あるいは別途‘それぞれの部門における諸教授の援助と、関心ある図書館人の協力とを得て、私は1872年から76年の間に、逆ベーコン式の順序に従って10個の類、100個の綱、そして1,000個の目をつくり上げて行った’、とも記している<sup>133)</sup>。ここでいうセント・ルイス図書館 (St. Louis Library, Ms.) とは、正式には“セント・ルイス公立学校図書館” (St. Louis Public School Library) であり、時の教育長 (1857—’68) ディボル (Ira Divoll) の異常な努力によって1865年開設されたものである。その当初は“公立学校図書館協会” (Public School Library Society) による運営であり、会員をきびしく公立学校関係者に制限し、終身会員 (会費年12ドル) の投票によって選ばれた16人をもって理事会を構成、公立学校教育委員会の委員長が当然理事として参加するとともに、理事長に就任する定めであった。結局はこれが、1869年 (4月17日) をもって教育委員会の所管に移され、1884年 (12月9日) にはその名称の中から“School” の一字を削除して、“セント・ルイス公共図書館” と改称、今日に及んでいるものである<sup>134)</sup>。

デュイがこの図書館における“逆ベーコン式”と呼んでいるのは、ディボルの後を受けて教育長 (1868—1880) に就任したハリス (William Torrey Harris, 1835—1909) によって考案された分類法であり、イギリスの哲学者ベーコン (Francis Bacon, 1561—1626) の知識分類における配列順序を転倒したものである。すなわちベーコンは、歴史 (history)、詩 (poesy)、哲学 (philosophy) の順序をとったのに対して、ハリスは、歴史と哲学の位置を逆にして、哲学、詩、歴史の順に改めたが、しかしこのいわば長い間の通説に対して現代では異論を唱えるものがない訳で

130) Dewey, M.: A Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 630.

131-133) Dewey, M.: Decimal Classification beginnings. *Lib. Jour.* Vol. 45 (No. 4), 1920 (Feb. 15), p. 152.

132) Dewey, M.: A Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 641.

134) Crunden, Frederick M.: The libraries of St. Louis, 1898 (*Contributions to American Library history*, ed. by Thelma Eaton. Champaign, Illini Union Bookstore, 1961, p. 216-236)

Bailey John Jay: Public libraries of St. Louis. *Public Libraries in the United States of America*, p. 977-999. “公立学校図書館”については p. 981-987.



このハリスとセント・ルイスとの関係は、彼が1858年（23歳）小学校（*Franklin Grammar School*）教師となって以来、この町の公立学校とは、教師・校長・教育次長・教育長（1868—'80）として22年間に及んでいる。1880年には東部の町コンコード（Concord, Mass.）所在の“哲学学校”（*Concord School of Philosophy*）に転じて、オールコット（Amos Bronson Alcott, 1799—1888）の許に加ったが、1889年には時の大統領（1889—93）ハリソン（Benjamin Harrison, 1833—1901）によって合衆国教育総長（U. S. Commissioner of Education）に任命された人（1906年まで在任）、指導的ヘーゲル主義者としてドイツ哲学の導入に努め、また英語で書かれたこの種の雑誌としては最初のものである“思弁哲学雑誌”（*The Journal of Speculative Philosophy*）の創刊（1867）に当たった人としても著名である。

このハリスと分類法との関係は、教師・教育行政家としての立場から、近代教育における図書館の重要性を痛感し、またその利用を効果的にするためには、すぐれた目録が与えられねばならないという考え方に立脚していたが、“セント・ルイス公立学校図書館”のために分類目録の作製を企図したのは、直接には上述のセント・ルイス商業図書館においてつくられた蔵書目録の分類が、“すばらしい実際的な成功”を収めている事実に刺戟されたためであったという<sup>141)</sup>。彼は教育長としてその職務上、当然この図書館の理事でもあり、そのような直接の関係もあって、分類表の作製に自身たづさわったが、上記グラチアーノによると、その分類表は非常に包括的であり、また融通性に富んでいるために、現に（1959年）なお12万冊の蔵書に対しても使用されているという。

ハリス分類法を用いて、1870年に刊行された目録<sup>142)</sup>は、この図書館では初めての全体目録であり、当時の蔵書2万4,000冊を包含するものであった。完全書名を載せた語順のものと、簡略書名をもってする分類目録との二様から成り、それが刊行された後は、カードを使用しての、語順・分類順双方の目録編成が継続されることになった。また書架上における図書の配列も、目録中の配列と同一方法に拠り、各クラスは、移動式のしおり（movable markers）を用いて区分し、各クラス内での図書は、アルファベット順をとり、書架番号（shelf numbers）を用いない方法が採用されたという<sup>143)</sup>。

この図書館創立（1865）以来の図書館長として、この目録編さんの当事者であったベイリィ（John Jay Bailey）は、図書館人の間には、図書の配列に哲学的分類表を用いることの実用性に関し、議論は大きく分れていたにもかかわらず、5か年間（1870—1875）にわたる実際経験の上

141) *Ibid.*, p.174-175.

142) *Catalogue Classified and Alphabetical, of the Books of the St. Louis Public School Library.* St. Louis, Missouri Book and Job Printing House, 1870.

143) Bailey, J. J.: *Ibid.*, p. 986.

では、利用し易いという点から好感をもって迎えられて来たこと、従っていわゆる“准アルファベット順”(subalphabetical)とか“辞書体”(dictionary systems)にまさる優越性を主張できるものであると報じている<sup>144)</sup>。

デュイがこのハリスのものを採択したいきさつについては、人によりいろいろに受けとられている。シェラがデュイによってそれが彼の分類表の枠組みとして採り上げられたのを、アマスト大学礼拝堂における感激的な瞬間と一体に取り扱っているのはその一例であり<sup>145)</sup>、ラモンターンのその感激的な瞬間において得た“解答”を、“最も簡単な符号”，すなわち‘アラビア数字を、あらゆる知識の分類に割り当てて行く’ことに限定している<sup>146)</sup>のと相違するが、カスターによってはこの間の消息がやや詳細にたどられている。彼によるとデュイが、“ハリス転置法”(Harris inversion)をもって、その基礎として行くことを決定したのは、まず“知識の分類”，すなわちアリストテレス、ジョン・ロックその他の哲学者によるもの、さらには比較的新しく刊行されたシュワルツ(Jacob Schwartz, 1846—?)およびハリスの分類法を研究した結果としてであったと記している<sup>147)</sup>。知識分類という点から言えば、結局デュイは、彼の分類法の場合、‘哲学的な理論および精確さは、実際の有用性にその道を譲ることになった’とのべているように<sup>148)</sup>、研究はして見たものの、それに準拠する態度は執らず、またシュワルツのものというものは、“助記式分類法”(mnemonic system of classification)として知られているもの、彼が在職(1863—1900, 1871より館長)していた“ニューヨーク徒弟図書館”(Apprentices' Library of New York)に対して1873年適用し、翌年刊行の同館蔵書目録に採用されたものである。ラモンターンのによると、このシュワルツ分類法は、アルファベット順分類目録(alphabetic classed catalog)の原則を、書架上における図書の配列に移そうとの企図を代表しているものであるという<sup>149)</sup>。しかしデュイ自身は、彼がこれを直接見たのは、すでにその分類法におけるすべての本質的な特徴を決定し終った後のことであったとのべており、従って当初の構想の中には何んら加わらなかったことを知ることができる<sup>150)</sup>。

そのほかカスターは、“十進法”という立場からデュイは、この形を執るものとして知られている3つの分類法についても同様検討を加えたことを伝えているが、具体的には、1583年という早い時期に、デュ・メイン(La Croix du Maine)がフランス王アンリー三世(Henry III, 1574—

144) Bailey, J. J.: Catalogue of St. Louis Public School Library. *Public Libraries in the United States of America*, p. 662.

145) Shera, J. H.: *Ibid.*, p. 83.

146) LaMontagne L. E.: *Ibid.*, p. 180.

147) Custer, B. J.: Dewey Decimal Classification and Relative Index. 16th ed. 1958. *Editor's Introduction*.

148) Dewey, M.: Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 625.

149) LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 189.

150) Dewey, M.: Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 641; LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 191.

89 在位)の文庫のために、おのおの100冊の図書を収容する100個の本箱(“*buffets*”)という形で考案したもの、つぎには、イギリスのミッチェル図書館(Mitchell, Glasgow)において、1790年頃、書架を10段の棚に仕切り、その中の数個に書物の各クラスを充当して行ったもの、最後のものは、ボストン公共図書館(*Boston Public Library*)の創立委員の1人であったシャートレフ(Nathaniel Bradstreet Shurtleff, 1810-1874)が、みずからこの図書館のために考案し、開館(1854)に先立って、1852年に完成提示し、採択されたものである<sup>151)</sup>。アルコーブ・書架列・書棚を十進的に設けて行く方法である。これらはいずれも言葉としては十進法であったとしても、それは書物それ自体に対してではなく、書物を置く場所(空間・書架・書棚)の方に適用する方法であったために、デュイに対しては結局、‘何んらの感動をも与えるものにならなかった’とのべている。

デュイ自身は、その“十進分類法と主題索引”の稿を結ぶ最後の段落において、分類法関係の雑多な文献を読み、また通信・会話を交わすことによって、到底感謝し切れないほどの貴重な示唆を受け、また知識が与えられたことを記したあと、‘中でもおそらく最も実りの大きい思想的源泉’に培ってくれたものとして、ミラノ(Milan, Italy)のバテザッティ(Natale Battezzatti)による“*Nuovo sistema di catalogo bibliografico generale*”を挙げ、1871年イタリー出版業者によって採択されたこの分類法から受けた恩恵に言及している。セイヤーズによると、この分類法は要するに“ブルーネの変形”(variant of Brunet)であるとされており<sup>152)</sup>、リチャードソンもまた、“イタリー書目”(Bibliographia Italiana)において、1871年11月に提案されたこの分類法は、‘実質的にはブルーネのそれであった’と記している<sup>153)</sup>。デュイのいう実り多き思想的源泉が果して具体的には何を意味するか、これだけの短い言葉の中からそれを正しく汲みとることは困難であるが、つづいて彼が、そうかといって自分自身の分類法が、このバテザッティのものにならう点は全くなかったとのべていることによって、分類法の構成それ自体には直接何んらの影響をも与えなかったことが知られるのである。セイヤーズは、このバテザッティのものにしても、またシッワルツのものにしても、それらとデュイ分類法との間に存する“類似”(Ikeness)を探し求めようとしたところで、それはまず不可能であるのに対して、ハリスのものを実際に手本とした事実だけは明らかであるとし、ベーコン、ハリス、デュイ3者のもつ連関を表示し、それを説明している<sup>154)</sup>。

バテザッティの分類法が、ブルーネのものあるいはその変形であり、デュイは、彼自身の分類法を構想して行く上には、その中から摂取し得たものが非常に多かったにもかかわらず、結局それには拠らなかったとしているいきさつは、ある観点から言えば、この国の分類史上において

151) Whitehill, Walter Muir: *Boston Public Library; a centennial history*. Cambridge, Harvard Univ. Press, 1956, p. 67.

152) Sayers, W. C. B.: *Ibid.*, p. 122.

153) Richardson, E. C.: *Ibid.*, p. 114.

154) Sayers, W. C. B.: *Ibid.*, p. 123.

は極めて重要な意味を残しているように思われる。すなわちデュイのものはすでに考察したように、ハリス、ジョンストンを経てベーコンの分類法に連っているのに対して、実はそのジョンストンが、いわばこの国に在っては、ブルーネの系統に立つ分類法の採用に大きな転機を与え、それとは別個のベーコンの系譜に結びつくものを発展させて行く契機を切り開いた人物であったからである。この間の出来事は、後に触れるごとく1867年をその中心としており、その年はデュイが分類法の問題に沈潜して行く丁度15年前に該当する。自然当時の館界をなお大きく支配していたものこそ実はこのブルーネの思想であり、当然デュイの心を大きく支配していたに相違なく、しかもバテザッティのもの(1871)は、その系列に立つ最も新しいものであった。

フランスの書誌学者として、その面の功勞によって“レジョン・ドヌール”勲章を与えられたブルーネ(Jacques-Charles Brunet, 1780-1867)が編さん刊行した目録<sup>155)</sup>に採用されたために、“ブルーネ分類法”(Brunet's System or Classification)・“パリ書籍商分類法”(System of the Paris Booksellers),あるいはまた“フランス式分類法”(French System)とも呼ばれているものは、主類としては神学・法律学・科学と芸術・純文学・歴史の5つを執るものであるが、それがハーバード大学図書館の目録に採用されたことによって、この国に重要な足跡を印することになった。おそらくこれがアメリカの図書館に適用された最初であろうと言われ、直接には1830—31年にわたり、3冊ものとして刊行された“ハーバード目録”(Harvard Catalogue)においてであった。

この“ハーバード目録”へのブルーネ分類法の導入は、時の図書館長パース(Benjamin Peirce, 1778-1831)によって行われたものであるが、果してどのような“熟慮”を経て、彼がそれを採択するに至ったかは、依然として‘推測の域を出でない’としても、その理由以上に実は、この目録がもともと、ただ図書のもつ標題中の“要語”を採り上げての、アルファベット順目録として計画されていたのに対して、彼は“分類目録”(classed catalog)としての機能をも新しく付与すべきであると主張し、それを“分類索引”の形において実現したこともつ意義が高く掲げられている<sup>156)</sup>。すなわちこの目録3冊のうち、第1・2冊は、当時ハーバード大学図書館が所蔵していたおよそ3万冊の蔵書を、当初の計画通りに語順目録として編さんし、第3冊を2部に分けて、第1部の方を“分類索引”(systematic index; 第2部は地図類の目録)に充当したものである<sup>157)</sup>。そしてこの索引に適用されたのがブルーネの分類法であった。しかし全くそのままの形としてではなく、パースは主題を1つ追加して第6番目の“類”を新しく設定し、それに“アメリカ関係文献”(works relating to America)を充当、なおアメリカの図書館向きに語

155) *Manuel du libraire de l'amateur des livres*. 各時代・専門にわたるフランス語の稀こう書を収録、価格を付したもの。初版(1810)3巻、再版(1814)4巻、3版(1820)4巻、4版(1843-44)5巻、5版(1860-65)6巻。

156) LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 122. なおパースは1826年フォルソム(Charles Folsom)の後を襲い、母校であるハーバード大学の図書館長となった。

157) Ranz, J.: *Ibid.*, p. 27.

種の変更を併せ試みたものである<sup>158)</sup>。

この“ハーバード目録”への採用を契機として、ブルーネ分類法はその後急速にアメリカ図書館界に普及し、その姿は、‘わずか一世代の間に大西洋岸から太平洋岸に至る図書館に採用されて行くようになった’<sup>159)</sup>ほどである。すなわち“ハーバード目録”を模範とし、1850年カーティス(William P. Curtis)が“セント・ルイス商業図書館協会”(St. Louis Mercantile Library Association)のために始めて作製した蔵書目録(51年補遺)によって北中部に到達し、そのまた影響を受けて1854年には“サン・フランシスコ商業図書館”(San Francisco Mercantile Library)がそれを採用したことによって、ついに西部に達することになった。その間は実際には一世代にも満たないわずか24年である。

このように非常な勢いでブルーネの分類法が普及して行った中に、他面においては、それとは異なる分類法を採用した目録が同時に作製されて行きつつあった。1836年ジョンストンが南カロライナ大学の蔵書目録に適用した上述のものがそれであり、しかも彼が1858年セント・ルイス商業図書館協会に入り、この年約1万4,000冊の蔵書その内容とするいわゆる“セント・ルイス目録”(St. Louis Catalog)<sup>160)</sup>を完成したことによって、実は同じ図書館の中で、その間わずか8か年という短い期間を挟んで、2つの対照的な分類法に基づく蔵書目録が作製される結果となった。すなわち1850年カーティスによってつくられたものは“ハーバード目録”に範をとってブルーネ分類に、これに対し1858年のものは、ベーコンのそれに従うものであったからである。しかも後者は、第3代大統領ゼファソン(Thomas Jefferson, 1743-1826)が自身、修正の上で、自分の蔵書に適用して来、しかもその蔵書(6,000冊)が議院図書館(Library of Congress)に購入(1815)されて、英軍によって議事堂と共に焼失されてしまった(1814)後の、この図書館における蔵書の新たな礎となっていた関係から、そのままに分類の基礎をなし、その意味からもこの国ではすでに大きな基盤をなすものでもあった。ラモンターンが、‘アメリカにおける図書館分類の上に、その優位を争っての、ベーコンおよびブルーネ間の衝突による最後の戦闘は、1857年セント・ルイス商業図書館において戦われた’とのべているその言葉は<sup>161)</sup>、1830年の“ハーバード目録”、1836年の南カロライナ大学の蔵書目録ができてから20年余、この国の図書館界では、2つの分類法をとりかこんでの激しい論争が行われて来たことに触れたものであり、同時にそれが、結局はセント・ルイス商業図書館において両者激突の事態を惹起したという意味である。その年を1857年とする直接の出来事については明らかでないが、おそらくはつぎの蔵書目録編さん刊行の方針についての激しい議論が行われた結果、前回の方針をくつがえしての、ベーコン分類法の採用となっただけでなく、つぎに連関するものであろう。1858年ジョンストンがこの図書館に入って目録

158) LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 129.

159) *Ibid.*, p. 131.

160) *St. Louis Catalog; Catalogue Systematic and Analytical of Books of the Saint Louis Mercantile Library Association, 1858.*

161) LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 156.

編さんを終り、ついで翌59年には、1848年以来11年間にわたり館長の職に在ったカーティスと交替して図書館長に就任（1862年辞任）したのも、その間のいきさつによるものであろう。しかも一図書館内におけるこのような転換が、‘1870年から今日に至る間のアメリカの図書館における分類法の道筋を決定する’という、まことに大きな影響をもたらすことになった。すなわちハリスによるセント・ルイス公立図書館のためにつくられた分類法の出現と、それに則ってのデュイ分類法の創案と普及がそれである。そして上述のような当時における図書館界の背景から眺めた場合、デュイがハリスのいわゆる“逆ベーコン式”に抛る立場をとったことが、実際には非常に大なる決断を必要としたであろう事情を想察することができる。

## 12

記号法について9個の主題に総記類を加えての主類表の決定を完了し、その後が続く主綱表・要目表に至るまでの分類項目の採択と展開についてデュイは、何よりもまずアマスト大学の教授団から受けた援助に対して感謝の意を表明している。すなわちそのほとんどすべての構成員から助言が与えられ、その協力を得たことによって、始めて分類項目の展開が可能であったことを記し、深い感慨をもって後年それを回顧している<sup>162)</sup>。ドゥによると、このアマスト大学教授団から受けた援助というのは、具体的には主題 (subjects) に関してであって、分類のことについてはなく、もっと直接的には、各教授の専攻 (lines) 分野の中には、どのような主題が当てはめられて行かねばならないかという問題についてであったという。結局デュイは、まさしくその“生涯の友”であったビスコー (Walter Stanley Biscoe) とともに、それら諸教授から得た回答主題と、同時にまた各種図書館のアルファベット順目録から採択して来た主題とを、分類表中に位置づけて行くという形でその素案をつくり上げて行った事情を伝えている<sup>163)</sup>。ラモンターンは、1882年デュイが、彼の分類法における哲学的、従って純理論的細分 (filosofical or rational divisions) という点に関する限りでは、‘自分自身の見解は何んらの価値にも値せず、分類表中での、そのような部分のうち、多くのものに対する著者ということになれば、とりも直さずそれはアマスト教授団である’と語っているその言葉を引用して、‘デュイがはるかに大きな関心を抱いていたのは、分類法それ自体ではなくて、むしろ非本質的な要素としての記号法であった’<sup>164)</sup> とのべている。これは分類法の内容を形づくる各項目間の論理的展開という“本質的な問題”に対してよりは、むしろデュイが主力を注いだのは技術的操作の面であったと見なしての言葉である。結局この哲学的・論理的ということになれば、その部分に対する“著者”としての役割を担ってい

162) Dewey, M.: A Decimal Classification and Subject Index, 1876, *Public Libraries in the United States of America*, p. 640

——: Decimal Classification Beginnings. *Lib. Jour.*, Vol. 45(No. 4), 1920(Feb. 15), p. 152.

163) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 166, 167.

164) LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 180. なおデュイのこの言葉は、彼の“Mr. Perkins Classification” (*Lib. Jour.*, VII, 1882, p. 60) 中のものとして引用されている。

るのは、上述のようにアマスト教授団であるが、しかしこの分類法はそうした全体としての論理性、主題順序間に存する発展的連関などは、とかく稀薄とならざるを得なかった諸事情を内包しているといつてよい。セイヤーズはデュイ分類法の成り立ちに関連して、それは当時におけるアマスト大学自体の“学問的な在り方” (state of knowledge) を反映したものであるとしているが<sup>165)</sup>、この大学は当初より小規模大学のすぐれた典型を目指し、しかも‘文芸と科学とのすべての部門’にわたり学生を教授する建前をとって来ている許りではなく<sup>166)</sup>、デュイ時代について言えば、教授団の半数以上は牧師であり、教授たちは、できるだけ多くの学生を宣教師・牧師として社会に送り出すことをもって自分たちの使命であるとさえ考えていた程である。自然そこには学問とか知識についての考え方に1つの大きな限界がある。そのみならずこの分類法はもともアマスト大学のみを対象としており、それ故にこそ教授団の積極的な援助が得られた訳であったが、必然的にそこにはこの大学図書館のもつ“実際的な要求”が最も強く前面に打ち出されている。デュイによると、この要求というのは、“各学科部門の便宜”に外ならず、もっと直接的には、‘この学生のために役立つような主題のもとに、各図書をまとめておく努力’への強い要請であったという<sup>167)</sup>。要は“アマスト分類法”に外ならず、こうした事情が、実際にはこの分類法に対する一般の認識を非常に遅らせてしまう原因ともなったものである。

デュイ分類法全体についていえば、デュイ自ら‘すべての主題をきっちり9つの標目に分割すること自体が、理論的には全く笑止の沙汰である’<sup>168)</sup>とのべているように、十進分類法が抛って立つ10区分の原則そのものも、何んら理論的根拠に立ってのものではない。ドゥも記しているように、‘自然は決して地上に在るすべてのものを、10個の群に整頓できるようにしている訳ではない’からである<sup>169)</sup>。自然彼が分類法に用いている原則の中に“独断”(arbitrariness)の存在が強く指摘されるのは、十進法のもつ非論理性、それに対するデュイの上述の言葉からだけでも、むしろ当然のことと言うべきであろう。同時にまた理論的性格の稀薄さについては、デュイ自身しばしばそれに言及している。すなわちこの分類法を作り上げて行く作業の全体にわたって、‘哲学的理論と的確さとは、実際的な有用性にその道を譲る’方針が一貫されたこと、また‘理論的な調整と厳正さとは、何度となく図書館のもつ実際的な要請、すなわちアマスト大学の各学科部門の便宜の前に犠牲にされてしまった’ことを明記しているところによってもその一端をうかがうことができる。事実彼はその観点からの批判に堪え得るものとしてその分類法をつくり上げている訳ではない。言いかえると、人々によって完全な分類法であるとか、あるいは満足すべきものであるとか、そうした評価を受ける期待のもとでそれを構想した訳ではなかった。‘如何

165) Sayers, W. C. B.: *Ibid.*, p. 130.

166) Amherst College: This is Amherst; a college of liberal arts and science. [1950] (*Leaflet*).

拙稿:メルビル・デュイの図書館思想とその形成 図書館界第19巻(第1号)1967年(5月), p. 11.

167・168) Dewey, M.: A Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 625.

169) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 162.

なる分類といえども、それは完全なものではあり得ない’ことをもってその前提としており、  
 ‘書物の中に蔵いこまれているあらゆる知識について、満足すべき分類を成し遂げるのは、到底不可能であることを、当初から知り尽した上での’それは企画であった。そして彼は自ら‘理論というものは不断に変化を遂げて行くもの’という言葉を用いて、新しい理論に合わせるために、分類に移動を加えて行こうとすることに対し、批判的な言葉を残している<sup>170)</sup>。

分類法に対するデュイの上述のような根本的態度から言っても、主類・主綱・要目など、それら相互間の論理的連携は、自然その当初から特別重要な問題としては意識されていないことが明らかであり、そのことが、彼の分類法に対して加えられた最も大きな批判の対象ともなった。それはデュイが分類法を創案した当時の意図とは別個に、19世紀も末になって来ると、図書分類法に対しては、1つの主題から他の主題への連続関係 (progression) に“論理性” (follow *logically*) の存在を強く求めるようになって来たためである。そしてこの要求は必然的に、デュイ分類法においては、何故に“神学”(後には“宗教”)が“哲学”のすぐ後におかれ、“社会科学”と“歴史”とが、その間に関連性をもたない多くの主類(語学・自然科学・工芸・美術・文学)を挟んで大きく引き離され、さらにはまた“語学”と“文学”とが隔離された形を執っているのかという疑問に向けられ、それらを“非論理的”と見なす立場から批判の対象として大きく採り上げるようになったからである。しかしながらその理由は結局解明されないままであった。グラチアーノによると、どの図書館人でも一時は以上類似の主題が遠く引き離され、逆に、明らかに関連のない主題が近接した関係におかれていることに奇異の感を抱いては来たものの、満足すべき解決が得られないまま、結局はその問題をもはや問い質そうともしなくなったのが実情であるという。そしてこうした不問の長い期間を経て、再びそれを採り上げるきっかけをなしたのが1949年におけるライデッカー (K. F. Leidecker) のウィリアム・ハリスに関する研究であり、しかも、デュイ分類法の主類は、ハリス分類法に発し、さらにその順序に従ったものである以上、つぎには、‘何故ハリス分類においてはそのような順序を執ったのか’という形で、さかのぼってその理由を追求して行く新しい段階に到達して来た経緯に触れている<sup>171)</sup>。

正しくセィアーズもいうように、‘デュイ分類法においては、その主類間に、発展的順序を見出そうとしたところで、それは無駄’である<sup>172)</sup>。ほかの人にとってはたとえ主類間の論理的配列が、分類法のそなえるべき根幹的なものであったとしても、デュイ自身においてはそのような考えられてはおらず、それは全くハリスによる“逆ベーコン式”への準拠であり、その間にデュイ自身による新なる論理的整序という過程が介在していないからである。しかしながら彼自身の上

170) Dewey, M.: Decimal Classification beginnings. *Lib. Jour.* Vol. 45(No. 4), 1920(Feb. 15), p. 153.

———: A Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 625.

171) Graziano, E. E.: *Ibid.*, p. 45.

172・174) Sayers, W. C. B.: *Ibid.*, p. 130.

にも、その晩年に及んでは、“歴史”と“社会科学”、“語学”と“文学”の2つを切り離れたままの形を執ったことが決して賢明ではなかったとする反省が訪れている。1920年（69歳）彼が、どのような分類法であってもそれに完全を求めることの不可能を説いたあと、‘昨日よりは今日’というふうに、確実にわれわれはよりすぐれた分類法をつくり得ること、従って彼の分類法は、もはや、工夫し得られるものの中ではそれが最善のものであるなどと考えることは無意味である点を強調したあと、

…今日われわれがもし新しく出直すことができるとしたら、当然いろいろな変更を加えるべきであるというのが事実である。それにもかかわらず、このままの形をいつまでも続けて行くべきではないというふうにしてしまうこともまたでき難いであろう。例えば、“歴史”が“社会科学”の後にくっつき、“語学”が“文学”の次に置かれるよう“ベーコン式順位理論”（Baconian order theory）を放棄して、第4類と9類との位置を置きかえるといった具合である

と記している<sup>173)</sup>。すなわちもし新たに彼の分類法をつくりかえることが許されるとすれば、何よりもまず“語学”（第4類）と“歴史”（第9類）との位置を転倒して、総記、哲学、宗教、社会科学、歴史、自然科学、工芸、美術、文学、語学の順序をとるよう変更を加えるべきであることを示唆したものである。しかしながらすでに言及したようにデュイは、“理論”は不断に変化を遂げて行くものであるという立場から、図書館の分類法に、新しい理論を追跡して行く形での移動を加えようとする態度には批判的であり、それどころか、セィアーズが指摘しているように、彼はもともとと学者が種々に試みて来た知識分類の“範疇”（categories）に従った形での分類法は全く企図しなかったと言ってよい<sup>174)</sup>。従って以上の主類位置の変更がたとえ望ましいとしても、現実にはすでにそれは困難であり、改変に伴う混乱と弊害は避けるべきであるとして、つぎのようにのべている。

20か国内の何千という図書館が、すでにこの分類法を使用しており、DC番号は目録・索引その他のものに、何百万ページにもわたってすでに印刷されている。…1つの図書館において、番号を変えることなしに、これらの大きな類の位置をそっくりそのまま置きかえることは簡単である。しかし単に主類だけにとどまらず、沢山の細目にわたって、何百万という“記入”（entries）に変更を加えるのはきわめて困難なことであろう

と<sup>175)</sup>。

以上のように、デュイ分類法における主類配列の非論理性が強く批判され、デュイ自身またその晩年においては、それへの反省を示していることも事実であるが、しかしその当初における彼の企図は、そのような批判に堪えるものとは、全く別個のものとしてつくられたのがその実情である。このことは彼がすでに1876年、

蔵書はまず“類”と呼ばれる9個の特殊図書館（special libraries）に分類される。…つぎにこれらの

173・175) Dewey, M.: Decimal Classification beginnings. *Lib. Jour.*, Vol. 45(No. 4), 1920(Feb. 15), p. 153, 154.

特殊図書館すなわち“類”は、‘独立的に’(independently) 考えられ、それぞれに再び9つの“特殊の綱”(special division) に切り離される。さらにまたその“綱”は、9個の“目”(section) に分離されて行く

と記しているように<sup>176)</sup>、それぞれの“類”は、他との関連をもたない形での“特殊図書館”として考えられ、“綱”や“目”についても、同様の思想が貫ぬかれている。またデュイ自体がそのような説明している許りではなく、一般への普及に際しても彼の分類法は、特にそうしたものとしての説明が加えられている。例えば“ライブラリー・ビューロー”(Library Bureau) の“型録”で、デュイ分類法の場合はその“類”が、それぞれ別個の図書館(separate library) として取扱われるものであるとの解説を付しているが如きはその好例であろう<sup>177)</sup>。セアーズもまた、デュイが自分の分類法を‘9個の特殊図書館を分類して行くためのもの’と見なしていたことは明らかであるとして、結局デュイ分類法は、‘9つの別個の分類が、その体系をつくり上げるために連合した(conjoin)’という印象をわれわれに与えるものになってしまったとのべているのは<sup>178)</sup>、よくその間の事情に触れた言葉として聞くことができるであろう。

13

デュイ分類法は後には国際的な普及を見るようになったとはいえ、国内においてさえ、一般の認識が獲ち得られるまでには、その間に幾多の曲折が介在している。すなわちすでにのべたように、この分類法はもともとアマスト大学をその対象としたものであり、従ってこの大学のもつ学科構成・学生への便宜など、総体的にいて学内における‘実際上の有用性’(practical usefulness) が、“理論的な調和”(theoretical harmony) を随所において犠牲にしたものであった以上、その当初から大きな制約のもとで作製されたものであった。こうした事情が、一般への認識を遠ざける原因となったことも事実であろう。しかしながらそれとは別個に、この分類法のそなえる本質的な要素が、その要因をなしている事例がここでは考察されなければならない。

いうまでもなく、この分類法が最初に適用されたところはアマスト大学に外ならないが、実はデュイ分類法が誕生したこの大学においてさえ、それが至って短命に終わったという事実が、その当初において担った多難な道を端的に物語っている。このこと自体は正しくドゥのいうように、‘予言者はおのが里には迎えられることなし’という言葉通りであるが<sup>179)</sup>、こうした事態の到来は、デュイがアマスト大学を去り(1876)、ついで彼とともに要目表の完成に従事し、さらに第2(1885)・3(1888)版の改訂に従ったビスコーが、デュイに招かれて同じくこの大学を離れ(1883)、コロンビア大学図書館の上級司書に転じた後のことで、結局デュイ分類法がこ

176) Dewey, M.: A Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 624.

177) Classified illustrated catalog of the Library Department of Library Bureau, 1899, p. 14.

178) Sayers, W. C. B.: *Ibid.*, p. 130.

179) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 171.

の大学に適用されたのは、その試行期間を含めてもわずかに10年足らずという短いものにすぎなかった。この間のいきさつというのは、ビスコーの去ったあと、この大学の専任図書館長（1883-1917）となったフレッチャー（William Isaac Fletcher, 1844-1917）により、‘十進法を無視した形で’、デュイ分類法が大きく修正されてしまったことに外ならない。

このフレッチャーには、‘アメリカにおける公共図書館’と題する小著があり、この中に彼自身の創案に係る分類法が掲載されている<sup>180)</sup>。彼はアメリカ図書館協会の会長（1891—’92）も勤め、特に‘プール索引’（*Pool's Index*）の協同者として早くその名を知られた人であるが、ボストン・アセニウム（1861—’66）、ブロンソン図書館（Bronson Library of Waterbury, Conn.）、ワトキンソン図書館（Watkinson Library of Hartford, Conn.）などを経て、1883年アマスト大学図書館長に就任して在職34年に及び、1917年現職のまま没した。いずれにせよフレッチャーによるこの措置、すなわちデュイ分類法の生命である十進法を無視した形での修正は、事実上それの抹殺に外ならないが、このようにして逸早く‘十進法そのものに対する強力な反動’が、しかもそれを産み出したアマスト大学の内部に現われるという有様であった。

このアマスト大学を別にすれば、デュイ分類法が、規模の大きな図書館において、実地に適用されて行った最初はいうまでもなくコロンビア大学である。そしてこれは1883年デュイがこの大学の図書館長に迎え入れられたことによって始まり、またこのこと自体も実は、彼の分類法による新たな蔵書の整備・目録の作製が期待されたために外ならない。すなわちデュイ招へいの直接責任者であった時の大学総長バーナード（Frederick A. P. Barnard, 1809-1889）、ついで図書館長であったパーゼス教授（John W. Burgess, 1844-1934）の2人は、デュイの人物と業績をよく理解し、あたかもこの大学の図書館が新建築に移転（1883）したのを機会に、彼を専任図書館長として迎えることによって、大学図書館の根本的な改革を企図したからである。

リチャードソンによると、1890年彼がプリンストン（Princeton）大学図書館に転じた頃では、デュイ分類法は完全にコロンビア大学に適用されるようになっていたという<sup>181)</sup>。この年は実際にはすでにデュイがこの大学を去って（1888年12月、正式には1889年1月）1年の後であるが、いずれにしても大学内の全蔵書が、デュイ在職中に、彼の分類法によって整備し直された実情を伝えるものである。それはまことに労苦の多い作業であったにもかかわらず、またその背後にはバーナード総長の強力な援助があったにしても、大学教授団によっては決して好感をもって迎えられぬものとならなかつたばかりではなく、総長の辞職（1888年5月、1889年4月死去）、ついでデュイがこの大学を去ったことによって、結局は根本的な変改が加えられることになった。すなわちデュイの後任として発令（1889年1月）されたのは、彼のもとで副館長（assistant librarian）

180) Public Libraries in America. Boston, Roberts Brothers, [c]1894. Appendix I: Scheme of Classification (p. 121-137). この書は‘Columbia Knowledge Series, No. I’として刊行されたもの、本文は120ページ（p. 1-120）で小形本（17.5cm）。

181) Richardson, E. C.: *Ibid.*, vi.

の地位にあったベーカー (George H. Baker) であるが、就任に伴ってデュイが打ち樹てて来た“主題の分類配列” (the Dewey classed subject arrangement) を廃し、それを辞書体配列に代えてしまう作業が推進されることになったからである<sup>182)</sup>。またこの大学の教授団がデュイ分類法に対して示した態度を、分類法そのものに向けられた批判としてのみ受けとるには、余りにもその間の事情は複雑である<sup>183)</sup>。しかしいづれにせよ極めて冷淡な態度に終始したことは明らかであり、この事実がプリンストン大学図書館の“再分類” (reclassification) に当って、この大学の教授団にもそのままに反映している。

上記のリチャードソンは、1890年代のはじめ、プリンストン大学が、その蔵書に対する分類切り替えの問題を採り上げるようになったとき、この大学の教授団がデュイ分類法の採用を拒否したいきさつについて、‘彼らはデュイ分類法を全然問題にしようともせず、それが時代おくれのものであり、かつ非科学的である許りではなく、さらにはまたコロンビア大学の教授たちによっては、冷笑を招いている事実を強調しつづけた’と記している<sup>184)</sup>。おそらくは時の図書館長ならびにリチャードソンによって、この節デュイ分類法を1つの候補として提示したことに対する教授団の反応を伝えるものであろう。リチャードソンによると時の図書館長は、コロンビア大学図書館、特にその書庫内整備の実情をよく知り、しかも非常な満足をもってそれを利用した体験の持主であったという。またリチャードソン自身は、始め(1879—’80) アマスト大学図書館に勤務し、ついで“ハートフォード神学校” (*Hartford Theological Seminary*) の図書館勤務(1884—’90)を経て、このプリンストン大学図書館の司書(1890—1920)、その後図書館長(1920—’23)となった人であるが、アマスト大学図書館在職中は、デュイがこの大学を去ったあと、その事業を継承していた既述のビスコーを助けて、デュイ分類法への切り替え作業に加わり、その関係からいっても‘デュイ分類法については、きわめてよく承知していた’と自ら記している人である。同時にまた分類切り替えに伴う時間的消費の問題についての貴重な実際の体験をもとに、デュイのものをもって、分類法の中では‘最も実用的なもの’とする立場を執る人でもあった。しかしながら時の図書館長にしても、またリチャードソンにしても、デュイ分類法が、カッターの“展開分類法”(1891)や、そのほかのより新しい分類法と比較して見た場合、‘学問的でも、また近代的なものでもないという明白な事実には抗し切れる立場にはなかった’と記している<sup>185)</sup>。すなわち教授団の主張は、デュイ分類法のもつ学問的性格の稀薄さ・非科学性、つぎにはそれをすでに時代おくれのものとする立場からであり、おそらくその点に関する限りでは、コロンビア大学教授団についても共通であったと見なし得るであろう。しかもリチャードソンなどにとっても、そのこと自体は“明白な事実”である以上、教授団の主張・デュイ分類法の拒否を食い止める術

182) Pettee, J.: *Ibid.*, p. 34.

183) 拙稿：メルビル・デュイとコロンビア大学 中国四国地区大学図書館協議会誌第8号 昭和40年10月

184) Richardson, E. C.: *Ibid.*, vii.

185) *Ibid.*, vi.

もなかった事情を伝えるものである。要するにコロンビア・プリンストン両大学の教授団が、デュイ分類法に対して示した態度は、学者として、分類法に学問的性格と・新しい理論への即応性を要求する立場に立つものであり、学者の“範疇”に従うことの不可能、新しい理論に追従して行くことに批判的であったデュイによる分類法にとっては、正に避け難いところといわねばならないであろう。

このような学者の立場からする消極的態度に止まらず、図書館人の中においても、デュイ分類法が余りにも実用的価値に偏した立場をとっていることへの批判が少なからず行われている。ミッチェル (Sydney Bancroft Mitchell, 1878-1952?) によるものなどはその代表的なものであろう。彼はモンリオール (カナダ) に生れ、そのマギル大学 (McGill Univ.) において学士・修士の課程を修めたあと、1903年ニューヨーク州立図書館学校に学び、直接デュイの教育を受け、その後カナダ・アメリカ双方の図書館・図書館学校に勤務、1946年カリフォルニア大学図書館学部長を最後に定年退職した人であるが、その40年に余る図書館人・図書館学教育者としての生涯を通じて、‘つねにデュイ分類法に対する不信感’を抱きつづけて来たという<sup>186)</sup>。彼によるとデュイ分類法には多くの長所があり、特に関連索引の詳細完備は、それを使用することによって、技術的作業が迅速に行われ、その点きわめて実際的であるにもかかわらず、彼自身にはそれがまことに機械的なものとして映じ、現代世界における複雑な主題を取扱っている文献を整理するものとしては、余りにも整いすぎ、かつ便宜に流れすぎるという点で、不信の念を拭い去れず、自然カッターの展開分類法を使用する図書館に復帰することについても、彼は別段それを遺憾とも感じなかったとのべている。

このミッチェルによつてはデュイおよびその分類法は、カッターとその展開分類法との対照において捉えられている。すなわち彼によるとデュイは、実務家 (businessman)・行政家 (executive) そして一たびある着想に到達すると、それに実用的な形態を与えてマーケットに運びこまざるにはおれないプロモーターであり、しかも自分の行為、その作製したものに対する確信を崩そうとはせず、人々をそれへの実施に駆り立てようとしたのに対して、カッターは逆に全く温和な性格、好感をもって人に接し、その点性格的にも2人は全く対照的な人物であったことを伝えている。自然分類法に対する態度もデュイに比してはるかに学者的・試行的であり、自然現代科学における試行錯誤の方法を尊重して、彼の展開分類法では、思索と実験の結果を絶えず採り上げ、不断に変更が加えられて行った点が強調されている。結局デュイ分類法が企図した実用的価値は、ここでは却って否定されている姿を見ることができる。

またパーキンス (Frederick B. Perkins, 1828-1899) がデュイ分類法に対して執った態度は、

186) Mitchell, S. B.: The pioneer library school in Middle Age. *Lib. Quart.*, Vol. 20 (No. 4), 1950 (Oct.), p. 285. なおその為人については、下記の文献に詳しい。

Powell, Lawrence Clark: Mitchell of California, 1958. *An American History Reader*, ed. by John David Marshall. Hamden, Shoe String Press, 1961, p. 325-331.

以上触れて来たいずれの場合とも異なる。すなわちその構成や性格に関連してのものではなく、機能に関するものだからである。彼は1857年コネティカット歴史協会 (*Connecticut Historical Society*) を振り出しに、その後はボストン公共図書館勤務などを経て、1880年サン・フランシスコ公共図書館 (*San Francisco Free Public Library*) の館長 (1880—'87) となった人であるが、そのときすでにこの図書館においてはデュイ分類法 (Mr. Dui's plan) が採用されており、これに対してパーキンスは早速それを廃し、自分が作製した分類法 (Perkins Classification) への切り替えを行ったことが記録されている<sup>187)</sup>。そしてこのことが、可動式すなわち相対的配架法という“新しい考え方” (“new” idea) に反対して来た図書館人たちの異論を再燃させる結果になったことが特記されている。彼は‘デュイ分類法を使用して見れば見るほど、益々それが好きになれない’と述べ、その理由として3つの点を挙げている。その1つは、大きさの違う書物も、主題（あるいは形式）の類似に基づいて一しょにして行くことから生ずる書架の浪費、つぎには絶えず新しい書物が挿入配架されて来ることによって、必然的に起って来るひんぱんな移動とそれに付随する損傷、最後に、書架上における図書の位置が不断に変更されて行くために、その場所を記憶しておくことができなくなってしまう不便とそれに伴う奉仕面の非効率化の3つである。要するに、‘固定式配架こそが、書架上における図書配列にとっては確実な原則’と見る彼の立場から、いわゆる“相対的分類法”としてのデュイのものがもつ機能を全面的に拒否したものであって、このことは、伝統的な配架法をなおも固執して、その立場からデュイ分類法に強く反対し続けた人々が少なからず存在していたことを物語っている。また“パーキンス分類”というのは、1850年グラント (Seth Hastings Grant, 1828—1910) が、当時自分が館長 (1849—'66) であった“ニューヨーク商業図書館” (*New York Mercantile Library*) のために作製したものを基に、それに修正を加えて成ったものであり、その起原は“ブルーネ分類法”に発している。

14

デュイは、議院図書館 (*Library of Congress*) が、新しい分類法の制定に当って、その記号法・全体としての構造においても、自分のそれとは全く別個のものをつくり上げて行ったことをもって、図書館方式 (library methods) の本来あるべき姿を拒む結果になったとし、それを非常に遺憾としたが<sup>188)</sup>、一方時の議院図書館長 (1899—1939) バトナム (Herbert Putnam, 1861—1955) もまた、当時すでに一般的に使用されている分類法を採択できた場合に受ける偉大な便宜・奉仕活動の面にもたらされるすばらしい効果に言及したあと、議院図書館がついに独自の分類法を作製せざるを得なかったことに関し、‘…われわれは、暦の上にはさらに1つの罪悪を、そしてまた一層の混乱とをつけ加えて行くことになった’として、その苦衷を披れきしている<sup>189)</sup>。けだ

187) LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 195—196.

188) *Lib. Jour.*, Vol. 57(No. 3), 1932(Feb. 1), p. 146.

189) LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 233.

しデュイにしてもまたパトナムにしても、ともに当時としてはむしろ稀れな、いわば図書館の道一筋に歩いて来た生粋の図書館人であった。そしてデュイは、‘ライブラリー・エコノミー’という立場で、標準的な分類法の確立を一意念じ、パトナムはまた事実上この国の国立図書館である議院図書館が、さらに全く新たな分類法を作製したことによって、標準分類法への道が大きく閉ざされて、分類の不統一に一層の拍車がか付けられ、その混乱をますます大きくする結果に導いたことを遺憾に思ったからである。そのような配慮が存したにもかかわらず、デュイのものが結局は議院図書館の新しい分類法とはなり得なかつたいきさつの中には、やはりこの分類法の本質に深く結びついたものが見られる。

ウィリアム・カッターは、その間のいきさつ、特にその初期の事情について、

議院図書館が、新しく分類法を作製する決定を行った際、館長パトナム、分類担当者マーテル、それに私の3人によって構成された委員会（三人委員会）は、デュイの十進分類法、カッターの展開分類法のいずれかを使用している図書館を広く訪ね歩いた。またカッターおよびデュイ両氏を直接訪問して、その時までで得ていた図書館人からの示唆のうち若干、そしておそらくはその方が望ましいのではないかとわれわれにも思われていた程度の変更について申入れを行った。これに対してカッター氏の方は、慎重に考慮された上で、必要とされることであれば、どのような変更が加えられようと、何んら異存を挟むものではないと答えたのに対し、デュイ氏は逆に、すでに彼の分類法を使用している図書館に影響を及ぼし、不都合を来すことになるという論法をもとに、どのような変更をも絶対に拒否した

と記している<sup>190</sup>。パトナムが館長に就任したのは1899年4月5日のことであり、従ってこの事実はそのあと、そしておそらくはそれから余り遠くない同年中のことであろうと思われる。パトナム館長としては、でき得れば既存分類法の基礎の上に、議院図書館の新分類を構想して行くべきであるという考えのもとに、そのような申入れを行った訳であるが、しかしラモンターンによると、この節デュイに対してなされた変更申入れは相当広範細微にわたっており、もしもデュイがその変更条件を受諾していたら、デュイ分類法はもはやデュイのそれではないものになってしまったであろうとのべている<sup>191</sup>。結局最終的な決定はマーテル（Charles Martel, 1860-1945）に委任されることになったが、彼は当時プールが館長であったシカゴのニューベリー図書館（*Newberry Library*. 1892-97 在職）から、1897年議院図書館の分類主任（1897-1912；1912-’30目録部主任、1930-’45分類・目録・書誌担当顧問）として招かれ、新分類法の制定に献身した。すなわち議院図書館（1800創立）は、その新建築（現在の本館）が完成（1897年2月）したのを機会として、新分類の採択を決定していたからである。それというのもこの図書館において使用されて来た分類法は、すでに述べたように大統領ジェファソンが、自分の蔵書のために用いていた方法をわずかばかり修正・展開したものにすぎなかったからである。しかしながら分類切り替えの問題がいよいよ軌道に乗せられた1898年の始めにおけるこの図書館の蔵書はすでに75万冊、もはやこうした古い分類法を維持して行くことは到底不可能であった。

190) Cutter, W. P.: *Ibid.*, p 45.

191) LaMongtagne, L. E.: *Ibid.* p. 233.

マーテルは1929年、当時における蔵書数370万冊のうちで、実にその3分の1を占める図書が、歴史および社会科学に所属する事実を挙げて、議院図書館における新分類法制定に際しての根本方針は、このような蔵書発展の偏向を見越した上で樹立されねばならなかったこと、結局参考することのできた各種の分類法・他の図書館におけるいろいろな体験などを慎重に研究したあと、この図書館がもつべき蔵書の性格、それに利用上の諸条件の2つが、この図書館自体の要求を満足させるよう考慮された分類法の構成を求めているとの結論に到達したとのべている<sup>192)</sup>。要するに議院図書館であるとともに唯一の国立図書館として、蔵書の性格・また利用上の諸条件が他とは異なっており、2つのこの特殊性を織りこんだ形で分類法の作製を行うとすれば、結局は独自のものを作らざるを得ない結果になってしまったという意味である。

デュイ分類法との関係からこれを言えば、マーテルはすでに1898年、すなわち議院図書館に赴任して来た翌年、時の図書館長ヤング (John Russel Young, 1847—'99. 1897—'99在職, 1899年1月17日死去) に対し、デュイ分類法と他のそれとの比較、その利点と不便とについて、それぞれに5点・9点を挙げて説明しているが、さらにまた新館長パトナムに対しても、1900年モントリオールにおいて開催されたアメリカ図書館協会の総会を機会に、当時目録部の主任であったハンソン (James Christian Meinich Hanson, 1864— ) とともに、著名図書館人の意見を徴し、特に9人に対しては直接面接した上での報告書を提出している。それによるとデュイ分類法は2.3の規模の大きな参考図書館だけに採用されていること、しかもそれらの図書館においては、大きくそれを修正した上で使用している旨を報告し、さらに主要な欠点としては、(1)スペースの均衡を欠いた配分 (2)多数の類と綱の非科学的配列 (3)類の、綱・目への10区分による独善的な細分 (4)分類法の作製者側が、これらの“短所”を改めることにも、また表の改訂を行うという問題に関しても、‘この分類法をすでに使用している人々を混乱に陥し入れない’とのきびしい制約の下におかない限りは、他の人によって変更が加えられることを許さしようともしない頑迷な態度の4つを掲げている<sup>193)</sup>。すなわち多くの“欠点”をもつにもかかわらず、すでにその分類法を使用しているものに混乱を与えるが如き変更は許さないとするデュイの基本的態度が、そのまま“欠点”の中に数えられている。結局マーテル自身は、カッターの展開分類法をもって議院図書館新分類の基礎として行くことを勧告した訳であるが、一方また1865年から97年に至る32年間にわたってここの館長であり、その間この図書館をもって、同時に大規模な国立図書館として行くことを唱道し、新館建築の完成によって事実上ついにそれを果たしたのを機会に、館長職を上記ヤングに譲り、再び32年前の館長補佐主任に復帰して死去の年に及んだスポフォード

192) Martel, Charles: The Library of Congress Classification; some considerations regarding the relation of book or library classification to the “order of the science”. *Essays offered to Herbert Putnam, by his colleagues and friends on his thirtieth anniversary as Librarian of Congress 5 April 1929*, ed., by William Warner Boship and Andrew Keogh. New Haven, Yale Univ. Press, 1929, p. 327-332.

193) LaMontagne, L. E.: *Ibid.*, p. 232.

(Ainsworth Rand Spofford, 1825-1908) が、強力な十進記号法の反対者であったことも、また同時に併せ考えられねばならないであろう。すなわち、‘それがどのようなものであっても、十進記号法を含む分類法を彼は拒否し続けた’<sup>194)</sup>といわれているほど、彼のそれを拒絶する態度には極端なものがあったからである。

パトナム館長が上記のマーテルによる報告書を受けとったのは10月のことであり、それによって彼は最終的な決断を下し、その年の暮れには、議院図書館のための新分類法を推進して行くことになった。上述の彼の“苦衷”として触れた言葉は、1905年ポートランド (Portland, Ore.) において開催された図書館協会の総会席上、館長自身が議院図書館分類法の問題、その到達した結論に触れた発言の末尾をなすものであるが、その前文としてのつぎの言葉は、その間のいきさつ、同時に分類法そのものもつ重要な課題を内包しているように思われる。このパトナムは、1883年ハーバード大学を卒業、翌年ミネアポリス・アセニウム (*Minneapolis Athenaeum, Minn.*) の館長となり、1887年このアセニウムが、新しく発足したミネアポリス市立公共図書館に併合された後も、そのまま市立図書館長としてとどまり1891年に及んでいる。ついで1895年にはボストン公共図書館長に就任、1899年(38歳)、時の大統領マッキンリィ (William McKinley) に対する図書館界の強力な推せん運動の結果、第8代の議院図書館長に指名された人であるが、その強力な推せん者の一人が外ならぬメルビル・デュイである<sup>195)</sup>。

もしもこの国立図書館が、一般に広く用いられるような分類法を採択することができたとしたら、どんなにかその奉仕活動はすばらしいことであろう！ 実のところわれわれはそのような分類法を夢に描いていた。しかしその夢は消え去ってしまった。われわれは長らく現存の分類法について、その中の1つをわれわれの図書館が採択した場合には、一般に広くそれが採り上げられて行くはっきりとした見通しが得られはしないかとの希望の下で熟慮を重ねて来た。長いこと考えては来たものの、しかし現存のどの分類法とて、一般的に通用している様子もなく、同時にまた同一性、すなわち同一請求記号という正にその目的を打ちくだしてしまうような修正を加えることなしには、われわれの図書館の目的に添わないであろうとの結論を下さざるを得ないと感ずるようになった。その結果、われわれ自身の分類法をつくり上げて行く方向をすすめることになった。

## 15

以上考察して来たように、デュイ分類法は、もともとはすぐれた分類目録を編成して行くための規矩としての構想に発しており、結果的にはしかし、過去長い歴史を通じて伝統的に踏襲されて来た配架法式を根本的に変革してしまった点で“革命的分類法”と呼ばれるものとなった。すなわち分類目録それ自体は、デュイのこの目録に対する強い信託性にもかかわらず、またデュイ分類法の出現によって一時的には再興のきざしを見たことも事実ではあるが、結局はこの国の場合、辞書体目録の盛行を前に、再び衰退の一路をたどることになった。その意味においてデュイ

194) Cutter, W. P.: *Ibid.*, p. 45.

195) Dewey, M.: Herbert Putnam, 1929. *Essays offered to Herbert Putnam* ...p. 22-23.

Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 353 (*Library of Congress Leadership*)

における当初の企図は、ついに実を結ぶには至らなかったといえることができる。

一方デュイ分類法は、くわしく考察して来たように、ほとんどあらゆる角度からの批判にさらされる結果にもなった。そしてそれら批判は、デュイのものにあきたらず、あるいはそれに対立する形を執って、また新たに種々の分類法を生み出す要素にもなった。しかしながらそのいずれも、ついに標準的な分類法としての地位を獲得するものとはならなかった。その中において独りデュイ分類法のみが、多くの曲折を経たあとにその地位に就いたことの意義は、いずれにしても正しく理解されねばならないであろう。それはデュイ自身が語っているように、‘別に宣伝をした訳でも、また取次人を置いて普及につとめた訳でもなく’<sup>196)</sup>、自然にそのような地位にたどりつくことになったからである。そこには大きな“時代”の背景がある。

フェローズは、デュイ分類法が世界に広く普及して行ったこと以上に、それがもつより本質的な、特に歴史的な意義に触れて、

十進記号法は、いろいろな理由によって称賛を博して来、かつそのもつ簡便さ (simplicity) が、デュイ分類法をして世界中に遍く普及せしめた1つの大きな要素であったことは疑を容れないとしても、私には、本質的な点でそれよりはるかに大きな重要性を担う、もう1つの別個の事柄があるように思われる。それはすなわち、デュイ分類法が、ほとんど普遍的に行われていた書架上における図書の固定的配置を、相対的配置の原則に置き替えることによって、図書館の管理・運営の方法を革命化したことであり、しかもこの相対的配架法は、たとえ記号法ならびに全体としての構成がどのようなものであろうと、デュイのもの以後に現われたすべての分類法の本質的要素となって来たものである

とのべている<sup>197)</sup>。すなわちデュイ分類法はもちろんであるが、同時にまたデュイのものにあきたらず、あるいはそれに対立する形をとってその後につくられて来た新しい分類法も、僅少の例外はあったとしても、そのほとんどすべてが、結局は相対的配架法を前提とする点では、デュイのものにならう形を執り、かくて図書館内における図書の蔵置形態、ひいては管理運営上の方法に根本的な変革がもたらされたことに言及したものである。すでに触れたように、その古い配架法が一般的には放棄されてしまい、相対的配架という新しいものと交替して行った時期は1890年代であり、デュイ分類法が公表されてからわずかに15か年を経過した後のことにすぎない。如何に相対的配架法が強く求められる時代的段階に到達していたかを知ることができる。ドゥは上記フェローズの言葉をもって、書物に対する現代的要求を通じ、図書館の資料は絶え間のない流入 (inflow) と流出 (outgo) とを繰り返して行かなければならなくなったのが近代図書館の姿であり、自然それは、図書配架の不動性 (fixity) に代って、逆に弾力性 (elasticity) をもつものにならざるを得なかった理由を解明しているものであるとのべている。

デュイ自身についてこれを言えば、相対的配架法が固定 (絶対) 式と比較してもつ“ただ1つの欠点”といえ、それは、‘10年後においても、しかも暗がりの中でも、もとの場所にその書物を見出すことができるという訳には行かない’点であるが、その欠点にもかかわらず、将来の

196) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 169.

197) *Ibid.*, p. 176.

小倉：デュイ分類法の形成過程

図書館は、たび重なる変更を免がれ得ない書架・書棚に対してではなく、書物にとっては永久不変のものである番号を、書物自体にあてがって行くべきであるという考え方であり、それによって図書館長は、あたかも司令官がその軍隊に対すると同じように、蔵書を自由に整備・配列・移動させることができるばかりではなく、それがどのような建物・書架であっても、混乱を引き起こすことなしに書物の配列が行われ得る点を強調している<sup>198)</sup>。デュイ分類法は、デュイ自身の言葉に従うと、‘相対的配架法のあらゆる利点を具えたもの’<sup>199)</sup>として形成されて行く結果となり、たとえ書架上における図書の実際配架に適用することは、当初の目的から言えば二義的なものであったとしても、却ってこの面において、革命的な役割を担うことになったのは、正しく時代がそれを切実に要求していた段階に到達していたために外ならない。

---

198) *Ibid.*, p. 174.

199) Dewey, M.: A Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America*, p. 634.